

## VI 学校訪問等報告、LD学会参加報告

### 1 平成 29 年度 教育支援資源視察

(1) 日時：平成 29 年 4 月 20 日（木） 9：20～16：40

(2) 視察先：

午前：アロハキッチン（横浜市立みなと総合高等学校学食、K2グループ各資源の  
セントラルキッチンの役割も持つ）

お好み焼きコロムブス石川町店（若者の就労訓練の場）

にこまるソーシャルファーム（寮併設の若者就労訓練、都市型農園）

ヒューハウス（グループホーム）

K2ハウス（自立援助ホーム）

Hata Labo（就労移行施設）

お好み焼きコロムブス根岸本店（若者の就労訓練の場）

パン屋のおやじ（就労継続A型施設）

午後：南部ユースプラザ（相談、居場所）

250 食堂（若者の就労訓練の場）

放課後ドラマぽによ+（学童保育）

K2事務所（K2グループ事業の統括）

フェロップ（就労継続B型施設）

湘南・横浜若者サポートステーション

(3) 概要：

○ひきこもりの若者の相談場所、居場所、社会参加するための就労の場、訓練の場等、K2グループの多種多様な資源を実際に訪問し、そこで活動する方の様子や、スタッフ（ほとんどがひきこもり経験者）の話を伺った。

○本校卒業生が3名お世話になっており、その中でフェロップを利用している方が、今回のために、フェロップの説明をしてくれました。午前中に練習したそうで、緊張しながらも、フェロップを「安心して働くことのできる場所」と話してくれました。

○最後の湘南・横浜若者サポートステーションで、振り返りを兼ねて質疑応答や感想を伝えあう場を設けたことで、理解が深まり、外部機関との連携の必要性を再確認できました。



にこまるソーシャルファーム



H a t a L a b o



K2ハウス



フェロップ



湘南・横浜若者サポートステーション

#### (4) 参加者の感想

- これまで全く経験したことのない学校現場なので、どのように生徒が卒業後（また在学中）外部に受け入れられていくのか見られて、とても勉強になりました。
- どこの施設、店舗も室内の清掃が行き届いていたことに驚いた。あのようにきれいな環境を保とうという姿勢、行動は生徒が掃除をしない学校だからこそ私たち教員が見習うべき部分だと思う。  
同じような境遇にいた人が店長などをしていることが、現在働いているスタッフはもちろん、これから働くために行動しようとしている人にとって、とても心強く、働くモチベーションになっているように見えた。
- 先日聞かせていただいたお話から学び、感じ取ったものは生徒指導・支援に役立つものばかりであった、と同時に本校の卒業生が活躍している場面を見られるいい機会になった。
- アロハキッチンで対人関係での配慮に驚きました。（小さい部屋で作業できる・戸棚があり、お客さんから直に見られずに作業できる）  
自立援助ホームでは支援員の方が一緒に住んでいることを初めて知りました。  
どの施設もとても清潔。掲示物など手入れが行き届いていると思いました。学校も見習うべき（古い掲示物を一新したい）  
児童相談所との連携・矛盾についても勉強になりました。（横浜市の人を優先して利用できるようにしていること・親の所得が安定している子どもたちもいること）  
それぞれの施設の代表者もひきこもり経験があることがわかりました。ひきこもり経験を隠さず、話してくれたことも印象的だった。  
このような施設が身近にあることがあまり世間に知られていないことに驚きました。もっと一般的になれば、助けを求めている人たちにつながりやすくなるのかなと思いました。世間的に目立たないマイノリティーの人たちに最初に目を向け、支援しようと考えた人たちは本当に素晴らしいと思います。貴重な体験をありがとうございました。
- ツアーに参加して最後の感想でも言いましたが、養護学校での仕事では学年に1人の進路担当が40人の特性に合った支援先を見つけていき、担当が支援先実習等の様子など家庭、進路担当に報告などで支援先の決定につなげていました。  
今回、引きこもり・コミュニケーションの苦手な生徒など自分にとって新しい事柄での、就労体験等施設の見学ができ、とても勉強になりました。  
引きこもりからの抜け出しのきっかけや、失敗例なども詳しく聞けばよかったと終わっ

てから自分で反省しました。ありがとうございました。

- 今回は、社会にうまく馴染むことができない人たちへのサポート施設や、自立するための多様な働き方があることを知ることができて、よい機会になりました。また、現場で働いていた人がしっかりと話ができている、仕事や作業に自信を持っているように見えたのが印象的でした。

就労移行支援、就労継続支援（A型、B型）の区分はどのようになっているのか（どのような子がどの区分になるのか）。就労者と就労施設とのマッチングはどうすれば上手くいくのか。就労施設への定着率（離職率）はどのくらいなのか。手帳の種類と取得までの流れはどうなっているのか。

など、これからいろいろと学んでいかなければならないことが、明確になってきたような気がします。今回のツアーで訪れた場所以外にも、まだまだ県内には関連施設があるようなので、少しずつ学んでいきたいと思いました。今回は貴重な体験をありがとうございました。

- グループホームや引きこもりの就労支援など、報道などでそれらの活動について見聞きしていましたが、実際に足を運び、お話を聞く良い機会となりました。正直なところ、県内にこのような施設や会社があり、多くの“困っている”人を支えている場所があることは全く知らなかったもので、驚くことばかりでした。

実際に働いている人たちの話を聞き、ほんのふとしたこと（というのが正しいかわかりませんが）で生きづらさを感じてしまうこと、そしてそこから社会復帰する、しようとするのを支えようとする人たちの存在に多くのことを考えさせられました。訪れた場所がどこも温かい雰囲気、ゆったりとしていたことも印象的でした。

この1年、生徒との関わりや校内のいろいろな支援を見たり聞いたり関わったりする中で教育資源について考えたいです。また機会があれば、新たな視点を持って参加したいと思います。

- アロハキッチン：作業がしやすいように指示を可視化しているところに、働きに対する配慮が感じられた。（注意することを減らす努力が、気持ちよく働ける環境につながるのではないかと）

にこまるソーシャルファーム：ものづくり（とくに自然に直結するもの）は、植物も成長するけれど、人も成長させるのだということが実感できた。リーダーになっている方は、ファーム経験ないところから始めたとのこと。任せる、信じるのが人を変えるのかも知れない。事務所に使っている建物の内装も、自前で改装とのこと。

K2ハウス：運営している方も家族で関わり、その一体感が素晴らしいと思った。人材を見極めるヒントはどこにあるのか？

お好み焼きコロンプス：石川町のコロンプスも含めて、値段、味ともに感激です。

最初に支援メニューがあるのではなく、必要に応じて資源を増やしていったと、言葉で言うのは簡単なような気がします。それを、実際に運営し、人を育て、広げていっている事業を拝見して、驚きとともに感激でもありました。福祉の原点のようにも思います。自分を見失いそうになったら、ときどき原点に戻りにスタッフさんと交流させていただけたらと切に願います。

## 2 平成 29 年 9 月 6 日（水）山形県立霞城学園高等学校訪問

### 【学校の概要】

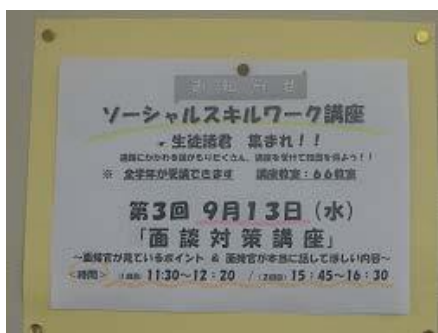
1997 年 4 月 13 日に山形県立山形東高等学校の定時制課程、通信制課程および山形県立山形工業高等学校の定時制課程が分離され、山形県立霞城学園高等学校が開校。当初は山形市の繁華街に程近い山形東高等学校の校舎を使用していたが、2001 年に山形駅西口に隣接する複合高層ビルである霞城セントラルがオープンすると移転。同施設の 5 階から 10 階に居を構えて現在に至る。

現在の霞城学園高等学校は、定時制（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部）が総計 234 名、通信制（Ⅳ部）が在籍 705 名であり、文科省の相談支援事業は定時制と通信制が共同で行っている。通信制としては、本校と同じく単位修得率や卒業後の進路決定率などを上げることを課題に挙げている。



### 【校舎の特徴】

- (1) 校舎として利用している霞城セントラルは、山形駅から一度も屋外に出ることなく建物に入る事が出来るため、生徒が登校しやすくなっている。
- (2) 建物の特性上、体育は体育館のみで行われているようだった。
- (3) フロアによっては別の組織と共有の部分もあるので、使用頻度が高い教室は共有フロアには置かない等の工夫がされていた。
- (4) 進路サポート室の扉はオープンになっており、入りやすい雰囲気を作り出す工夫がされていた。また、その部屋の入り口にはソーシャルスキルトレーニング講座の年間予定が貼られていて、生徒が確認できるようになっていた。
- (5) 掲示物は校内に少なく、その代わり絵画等が設置されていた。必要な掲示物は関係しそうな場所に集中して掲示されている等の工夫がされていた。



【講座の詳細】



【気持ちを落ち着ける部屋】



【部屋の前に掲示を集中】

## 【学習における工夫】

- (1) 「閉門日」（この日までにテストを受けないといけない、レポートを合格しないとくいけない締め切り日）を設け、生徒は見通しを持って学習に取り組めるように、担任は指導をしやすくなった。
- (2) 関係機関と連携したパソコン、ロボット工学などの公開講座を設け、単位認定をしている。
- (3) 営利企業に属するキャリアアドバイザーが週2～3回、学校に来てキャリアカウンセリング、キャリア学習の計画作成、キャリア学習の講師を行っている。生徒からの信頼も非常に高く、人事異動等を考えなくてもよいため、継続的な指導が見込める利点がある。県が予算立てをしてくれているが、その支援がなくなったときに指導体制が維持できるかが課題である。

## 【生徒指導と生徒支援】

- (1) 不登校生徒を支援するNPOの方など、学校に通うことに強い抵抗感を持っている生徒に理解のある方が学校評議員に加わっている。評議員からは、数値目標を掲げ、それに向かって指導することも大切だが、家庭基盤が弱い、心身の状態が安定しないなど多くの課題を抱える生徒が在籍している学校の実情に応じた、一人ひとりを丁寧に指導・支援すべきであるとの助言をもらっている。数値にとらわれ過ぎず、数値に表れにくい一人ひとりに対する丁寧な指導の実践に努めている。
- (2) 建物の特性上、校内一斉放送やチャイムを鳴らすことが難しい。生徒の登校・帰宅は職員室の名簿で行っており、生徒に用がある際は名簿に付箋を貼るなどして、直接連絡をとれるようにしている。
- (3) 半年に一度会議を開き、生徒の情報共有を図っている。特別な支援が必要な生徒については、名簿を作成し、職員に配布して情報共有に努めている。中学校からの申し送りを担任に漏れなく伝え、必要に応じてスクールカウンセラーなどにつないでいる。情報共有を図りながら、それぞれの職員が役割を分担し、指導・支援に当たっている。

## 【まとめ】

在籍生徒数は異なるものの、学習不安・対人不安・発達障害など様々な課題を抱える生徒が多く在籍している状況は、本校と大きく変わりが無いと感じた。生徒と接する時間が少なく、生徒の実態がつかみにくい通信制の枠組みのなかで、生徒支援の第一歩となる情報収集に努め、生徒が抱える課題を克服するため日々指導にあたっておられる先生方の取り組みは、非常に参考になった。

昨今の通信制の状況など、様々な情報交換を行うことができ、大変有意義な視察となった。数値にとらわれ過ぎず、一人ひとりに対して丁寧な指導を行う姿勢を本校でもよりいっそう大切にしていきたい。

### 3 平成 29 年 9 月 11 日（月） 徳島県立徳島中央高等学校訪問

#### 【概要】

- 文部科学省多様な学習を支援する高等学校の推進事業採択校  
調査研究課題：「つなぐ」徳島プロジェクト～支援・相談でつなぐ生徒の未来～
- 約 40 年前に定時制・通信制を統合した学校として開校。
- 夜間定時がメインで学校は発足
- 併設課程
  - ・昼間定時（午前部・午後部）、夜間定時、通信制
  - ・定定併修はある（午前・午後）
  - ・定時制夜間部は、通信制との併修のみ（5 名の生徒が現在受講）
  - ・定時制 0 校時は、学校設定教科「教養」（中学の復習）を 10 分間実施。（1 単位、午前部午後部ともに存在）
- 在籍生徒
  - ・在籍生徒数は 321 名。
  - ・編入生が圧倒的に多い。
  - ・生徒の区分には、本科生、併修生（他校で 19 単位以上取った他校生）、特科（聴講生のような制度）、技能連携生（県立看護学院衛生看護科）がある。
  - ・日曜生、木曜生各 1 クラス。新入生のみ木曜生 2 クラス、日曜生 1 クラス。
- 学校の方針
  - ・生徒にできる限り学力を付けさせて、社会に送り出すこと。
  - ・生徒同士がいかに仲良くなれるか。学校生活の楽しさを体験し、味わって欲しい。
- 学習システム、他
  - ・授業は、日曜日または木曜日、学習支援の日は、月曜日。
  - ・学習支援の制度としては、月曜日に行っている。その他の曜日に各教員の裁量で行っている場合もある。
  - ・いじめ、不登校の体験が学力形成を困難にしている。
- 教育相談関係
  - ・養護教諭は 2 名  
（夜間定時に 1 名専任、養護助教諭 1 名が 1 年契約で通信制と昼間定時）
  - ・徳島駅にあるサポステと連携している

#### 【文部科学省相談支援事業関係】

- 指導相談員
  - ・文部科学省相談支援事業は、学校全体で実施（メインは定時）
  - ・研究拠点校は、徳島中央高校。それ以外に夜間定時のある協力校が 5 校ある。
  - ・支援相談員の制度を整備
  - ・鳴門教育大学の臨床心理士コースの大学院生 4～5 名が中心、同大学に指導教員（元同校 SC の吉井先生）もいる。
  - ・指導教員と中央高校との個人的なつながりからこのプロジェクトは生まれた。

- ・協定などは特になく、信頼関係で動いている。
- ・指導相談員の具体的な支援内容は以下の通り

- 相談

- 生徒の就業相談・生徒の進路相談（保護者面談含む）
  - 教員の生徒に対する指導の相談
  - 教員の生徒に対する特別支援に関する相談

- 支援

- キャリア支援（職業適性検査やエゴグラム等で自己理解を促しながら）
  - 履歴書の書き方指導、各種志願書等の書き方指導
  - 面接指導（進学・就職・アルバイト）

- 授業

- 特別活動〔進路説明会〕（通信制課程）
  - マルチ基礎（夜間部）

- 会議

- 個別のケース会議 学年会 生徒支援スキルアップ勉強会

- ・少人数、マンツーマンで22:00位まで生徒と生活を共にすることもある。
- ・放課後支援の形で交通費のみの支給。文部科学省相談支援事業の期間のみで、事業終了後は、完全なボランティア。卒業式や学校行事にも、生徒との人間関係が強く結ばれているため、参加してもらっている。

- マルチ基礎

- ・「マルチ基礎」という全員必修の学校設定科目を設けた。（算数と国語の学び直しがメイン）課題を早く解ける人はどんどん先に行く形。県庁所在地をローマ字で書かせたり、割合が苦手な生徒が多いので、英語の中に割合の問題を入れたりしている。

### 【本校の教育活動に生かせること】

「マルチ基礎」などの学校設定科目によって、小中学校での学習内容に取りこぼしがあると思われる生徒に指導している点は参考になる。本校でもTRY教室である程度の対応は可能だが、科目としての位置づけの方が、生徒にいつその自覚を促すことができるのではないかと。かけ算の九九が十分にできない生徒、英語についてはアルファベットも不確かな記憶しかない生徒などに対しては、特定の科目に偏ることなく、社会生活を営む上での必要最低限の学習内容を可能な限り網羅できるという意味で、積極的な検討の対象にしてもいいように思う。

また、対応してくださった先生方の教育に対する熱い思いを強く感じる事ができた。単に卒業資格を取るという点に目標を置くのではなく、人生の重要な一場面としての高校生活という捉え方をして、できる限り自己を磨き他者と交わる機会を提供しようとしている点にも共感できた。

## 4 平成 29 年 9 月 12 日（火） 東京都立足立東高等学校訪問報告

### 【学校の概要】

1976 年に開校。初期の頃は荒れた時期もあり、地域との関係もうまくいって  
おらず、廃校を求める署名運動が起こるほどであった。学校改革の一環で、2003  
年から都内における「エンカレッジスクール」のパイロット校として動き出す。  
エンカレッジスクールやチャレンジスクールは東京都としても注力している改  
革のようで、一定の財政的配慮もされている。生徒数は 2017 年 4 月現在で 546  
名（男子 265 名、女子 281 名）であり、40 人定員 5 クラスを 6 クラス展開して  
いる。

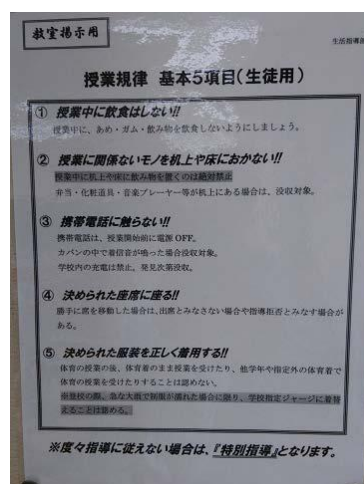
※エンカレッジスクール…東京都が指定した新しい形の高等学校。小学校や  
中学校で学習についていけなかったが、「基礎的な勉強からしっかりやり直  
したい」「学校に行くのは好き」という生徒を対象とする。

※チャレンジスクール…東京都が設置した高等学校で、主に中学時代に不登  
校経験のある生徒を対象としている。

### 【エンカレッジスクールとしての足立東高等学校の特徴】

- ①1 年次午前中における 30 分授業の実施
- ②国語、数学、英語は、3 年間習熟度別授業
- ③二人担任制
- ④茶道・和太鼓・イラストなど様々な体験学習の実施
- ⑤月曜日～金曜日の毎朝 10 分ずつスタディガイダンスの実施
- ⑥毎週 1 回、キャリアガイダンスを実施
- ⑦入学選抜に学力検査を実施しない
- ⑧定期考査の廃止

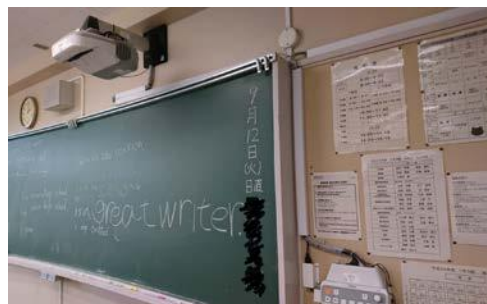
予備	8:25	
スタディ ガイダンス	8:30～8:40	
SHR	8:40～8:45	
	1 学年	2・3 学年
A 時限	8:50～9:20	1 時限 8:50～9:40
B 時限	9:30～10:00	
C 時限	10:10～10:40	2 時限 9:50～10:40
3 時限	10:50～11:40	
4 時限	11:50～12:40	
昼休み	12:40～13:20	
予鈴	13:20	
5 時限	13:25～14:15	
6 時限	14:25～15:15	





## 【施設見学】

- 電車の駅からは歩くと 30 分程度かかる立地条件にあり、23 区内と考えた場合決して交通の便が良い訳ではない。そのため、生徒は駅からバスを使用するか、自転車で通学している場合がほとんどである。
- 校舎の中の掲示物はきれいに整理されており、掲示物を貼る場所と貼らない場所をきちんと区別していた。学校全体として、教室内にも廊下にも掲示物は必要最小限という共通理解の下行っている整理とのこと。生徒の混乱を防ぐことを目的としている。
- 様々な体験学習を少人数で行うことを想定し、少人数教室が各フロアに複数設置されている。10 人程度(多くても 15 名程度)の授業を想定しており、小さな教室で行うことでより一人ひとりに目を配りやすくなるためである。
- 学年によって 30 分授業と 50 分授業を並行して行っているので、チャイムはフロアごとに鳴る仕組みになっている。また、校舎の造りもシンプルに長い廊下が一つあるだけで、その両端に HR 教室、中央部分に特別教室を配置するなど、動線にも気を配っている。
- 各教室には基本的にプロジェクターとスクリーンが常設されていて、ICT 機器を活用した授業展開を行っている。



## 【体験授業（毎週火・木・金の午後に実技科目を実施）】

- 和算（そろばん）、民謡（三味線）、和楽器・篠笛、和太鼓、化学、を見学。
- それぞれの授業で、座学ではなく体験的な講座が行われていた。メインの講師は市民講師と呼ばれる 20 数名の地域住民に参加してもらい、TT で教諭が配置されている。教諭の配置も、和算（そろばん）は数学の教員に頼むなど、できるだけ関係性をもたせるような配置を心掛けている。
- 化学の授業では、今回は豆腐を作っていた。以前には熱気球を作ったり、(茹でる前の) パスタで橋を作ってみたり、等の内容で班ごとに話し合いをさせたり、適度に競争を用いたりしながら、身近なテーマで理解を深めさせることを主眼に置いている。
- 三味線や和太鼓などの授業では楽器が必要となるが、基本的には学校の備品として購入して用意している。エンカレッジスクールになる際に様々な

予算を都がつけてくれているので、市民講師の謝金も、少人数教室も、備品も、それで賄っている。

### 【質疑応答】

Q：指導の4本の柱（学校行事・部活動、学習・進路、生活指導、健康・環境管理）のうち、健康・環境指導とは具体的にどのようなことをしているのか。

→様々である。地域的に家庭に課題を抱えている生徒も多く登校してくるので、食育も行うし、時には歯磨きの指導も行う。臨床心理士に月1回来てもらっているし、保健室にはけがや病気以外にもクールダウンするためのスペースも用意している。そのように様々なアンテナで相談できるシステムを整えている。年間延べ2千名の生徒が来る保健室には、養護教諭も2人常勤を配置している。

Q：問題を抱えた生徒の情報は職員間でどのように共有しているか。

→週に1回学年会を行って情報交換をしている。また、学年に1人特別教育支援相談コーディネーターを配置している。このようなことも、都から予算がついて人が多いのでできることである。

Q：生徒の指導に際して気を付けていることはあるか。

→当たり前なことでも「褒める」ことを徹底している。本校の生徒はボーダーの生徒も2割～3割おり、成功体験も少ない。学力ではなく「生きる力」を育てることを目的としているので、小さなことでも褒めて成功体験を積み重ねてやることも必要と考える。

Q：体験学習は教員にとって大きな負担ではないか。

→市民講師が実技の指導をしてくれるため、教員が専門外の技術指導を行わざるを得ないようなことにはならず、負担の軽減になっている。エンカレッジスクールのスタート直前の頃は、地域との関係も良くなく、講師の依頼にも難航したようだが、その時の綿密な話し合いとその後の関係づくりが功を奏して、今では地域と非常に良い関係を築けている。市民講師の中には「卒業を祝う会」に参加してくれる方もいらっしゃるくらい関係の構築ができています。ただ、地域との関係が深くなるということはその反面地域の活動に学校側も大きな期待を受けるということであり、その部分を忘れてはいけません。

Q：教員の中でノウハウの継承はできているのか。

→教員の通勤条件も恵まれている立地ではなく、普通科とは異なる様々なことをやる学校なので、正直教員の異動が少ないとは言えない。多い年は15人くらい異動する。また、都の規定で初任校は4年で異動、2校目

は原則定時制か離島となっているので、ノウハウの継承も楽ではない。今年の職員は45人中17人が10年以下の教員であることから、それらの若手教員をいかに育てていくかも学校の大きな使命である。

Q：定期考査がなく成績はどのようにつけているのか。

→科目によっては「確認テスト」を実施している。しかし、それらは評価の割合としては非常に低いもの(2割程度)である。成績はそれ以外の「態度」「出席」「授業中の発言」「提出物」等をつけることにしており、それは入学前も入学後も徹底して生徒に説明している。そのかわり、担当教員は毎時間細かく評価をつけておく必要がある。「できること」「きちんと取り組むこと」を評価するという考えで、真面目にやっていたら単位は取れるようになっている。入学の際の学力検査も行っていないが、これらの手厚いケアが人気で、受験生からは一定の評価を受けている。ただし、文化・スポーツの特別推薦枠が多少ある。

### 【まとめ】

本校の生徒層を考えると、エンカレッジスクールよりもチャレンジスクールに通う生徒の方が本校の雰囲気により近いのではないかと視察の前は考えていた。しかし、実際に校内を見て学校がどのような点に気を配っているかを知ると、根本的な部分に大きな違いはなく、むしろ共通点を多く見出すことができた。生徒に対して「余計な情報で混乱させないようにすること」「簡単な言葉できちんと理解をさせること」「やったことをきちんと評価してあげること」とそれらを通して成功体験を積ませることで「勇気づけていくこと」という流れは本校でも心がけていることではあるが「本当にできているか」をもう一度問いかけるいい機会となった。

## 5 平成 29 年 9 月 12 日 N 高等学校（代々木キャンパス）訪問

### 【概要】

#### (1) 学校の概要

学校名 学校法人角川ドワンゴ学園 N 高等学校  
課程・学科 単位制・通信制課程（広域）  
普通科（ネットを活用した映像配信授業）  
本校所在地 沖縄県うるま市 伊計島  
スクーリング会場 沖縄・東京・大阪・名古屋・札幌・新潟・仙台・広島・  
福岡（2017 年 10 月認可予定）  
開校 2016 年 4 月開校  
在籍数 3,881 名（2017 年 4 月）  
運営協力 株式会社カドカワ

#### (2) 校内見学

- 代ゼミタワーアネックス内を見学。外観はガラス張りとなっており、外からも中の様子が見えた。
- 1 階にはラウンジと受付があり、受付の機械で出欠席を管理している。2 階と地下には学習スペースや自習スペースがあった。一人ずつのスペースで区切られた学習スペースもあり、学習に集中しやすい環境がつけられていた。また、学習スペースには職員が常駐し、生徒の質問等に対応できるようになっていた。
- 別館があり、代ゼミタワーアネックス近くのビルの一部を間借りしていた。通学コースの「中国語」のスクーリングを見学した。30 名程度の生徒がスクーリングに参加し、他の生徒の前で中国語での会話を披露するなど、活発な様子が窺えた。

#### (3) 概要説明・質疑応答

##### 〈学びのしくみ〉

- 入学する際に、Mac のノート PC の購入を義務づけている。ただし、学習の際に使用する web コンテンツ等は、ほぼすべてのプラットフォームに対応している。
- 基本的にはネットコース（Basic Program）で 75 単位修得を目指す。
- 学年制をとっており、各学年の受講科目をパターン化している。年間最大 38 単位まで受講できるので、1 年目に数単位修得できれば 2 年生に進級できる。
- 単位修得は 1 年間を期限とし、それに間に合わなかった場合は最初からやり直す。
- 教科書は全て東京書籍を採択しており、東京書籍が作成した教科書解説動画を使用している。生徒はその動画を視聴しながらレポートに取り組むので、それを「視聴代替」としてカウントしている。レポートに到達するための確認テストと、レポート自体は N 高等学校が独自に作成したものを使用している。レポートのやり取りは全てネットで完結するため、郵送の必要はない。
- スクーリングは沖縄伊計島にある本校で行う。年に 5 日程度、学年ごとに内容が変わる。

基本的にはこの5日間で年間のスクーリングは完結する。沖縄に行けない場合は、各地のスクーリング会場に行く。スクーリングの内容とレポートは連動していない。

- ネットコースとは別に通学コースがある。通学コースは週1、3、5日から展開されており、Advanced Program（大学受験講座、プログラミング講座など）という専門的な学習内容に取り組むことができる。これは単位としては認定しない。
- 「N 予備校アプリ」というものがあり、問題集や参考書などのデータが入っている。また、そのアプリの中でネット配信の生授業を受けることができ、アプリ内のシステムによりアンケートや回答提出が可能となり、双方向の生授業を行っている。このアプリを利用して、大学進学や専門学校の特別授業などを学ぶ。
- 生徒同士が学習や学校での質問について教えあうシステムがある。また、過去に受けた質問はQ&Aとして保存し、同じ質問を繰り返さないようにしている。
- さまざまな場面に、ドワンゴのもつ「ニコニコ動画」のノウハウや、スクール経営をすすめる「バンタン」、カドカワのグループ会社であり学習参考書を数多く出版する「中経出版」などの資源がフルに活用されている。

#### <生徒像>

- 現在約4000人が在籍。全体のおよそ6～7割程度が不登校経験あり。
- おとなしい生徒が多い。

#### <生徒指導・生徒支援>

- 「Slack」というアプリを使い、ネット上でホームルームを行う。個人への連絡（生徒同士含む）もアプリ上で可能。生徒が自由にグループを作り、交流を図る場でもある。
- 生徒それぞれにマイページがある。保護者にもID、パスワードを伝え、学習の進捗状況等が確認できるようにしている。今後は紙媒体での連絡もする予定。
- 担任は40名で、一人当たり約100名の生徒を担当する。担任には添削業務やスクーリング担当、レポート作成業務はなく、生徒の学習進捗状況の確認や、電話連絡、面談などの担任業務に専念できるようにしている。
- 生徒の相談役として担任とは別にTA（チームアシスタント）がいる。TAはアルバイトやインターンできている大学生が多い。
- ネット上のトラブルは少ない。これは生徒自身がN高等学校を選択し、積極的に学びに来ているためと考えている。トラブルが生じた場合は、ネットコミュニティ開発部という専門の部署が対応する。

#### <進路指導>

- 2016年度（開校1年目）の卒業生は251名。提携している専門学校（バンタンなど）のルートで就職したり、そのまま専門学校に進学する生徒が多い。
- 今後は指定校推薦の拡充にも力を入れていきたい。
- 進路説明会を各地で開催。

#### (4) 感想

- クラスの担任は教科指導を行わず、担任業務に専念しており、かなり細かく生徒の学習進捗の確認や調整を行っていた。ネットでのつながりしかないからこそ、一人ひとりの生徒をしっかりと見る必要があるのだろう。また通学コースの担任も、生徒との面談等の時間がしっかりと取れるため、よりきめ細かな指導ができていたようであった。
- 「ニコニコ超会議」を文化祭として、生徒に運営に携わらせることや、日本全国での体験活動を取り入れるなど、生徒の体験活動に力を入れていた。生徒が達成感を得られ、またキャリア学習にもつながっているようであった。本校でも部活動や、支援教育の中で様々な体験活動を取り入れているが、さらにバリエーションを増やすことで、進路状況にも良い影響が出るだろう。
- 学習の進め方が基本的にネットでの動画視聴から始まるため、全ての教科で視聴代替を活用（いわゆる自動免除）していた。これにより、年に5日間のスクーリングのみで出席回数が満たすことができ、結果的に生徒の出席の負担は減っている。将来的には本校でも平日は現状通りのスクーリング、日曜・ITは映像コンテンツを利用した視聴代替（自動免除）を用いて、スクーリングは教科総合のみとした方が、平日と日曜・ITの位置づけがより明確になり、単位修得率が向上する可能性も感じられる。
- 年間5日間の沖縄でのスクーリングだが、基本的にはレポートと連動していない内容のスクーリングであった。本校ではレポートと連動していないスクーリングは、特設スクーリングの中で実施している科目もあるが、これを定期的に設置（回数を増やす）することにより、生徒の学習の幅が広がり、進学面での指導の充実も期待できる。
- ネットコースの生徒は基本的にネット上でのコミュニケーションのみになるが、そこでのトラブルが意外にも少ないことに驚いた。これは専門チームの存在が大きく、「ニコニコ動画」でのトラブルを解決してきたチームが、現在N高等学校のネットコミュニティ開発部に所属している。ネット関係の専門家がいるからこそ、様々なシステムが円滑に進んでいた。
- N高等学校では、支援教育に関しては特に取り組んでいないようだった。改めて本校の今後の支援教育を考えたが、やはり教員がSSW的知識をしっかりと蓄え、ベテランの方の支援のノウハウを共有し、教員一人ひとりがある程度生徒に対応できるようになるのが理想であり、システムチックに関係機関につなげていけるような連絡体制の構築が重要である。また、進路指導として就労移行のための関係機関との接続役の人員配置も必須と言える。
- N高等学校の取り組みは本校に取り入れたいものばかりであったが、いくつか問題点がある。N高等学校は開校からまだ1年半しか経っていないため、進路実績など結果がまだ出ておらず、取り組みの成果が確認できない。生徒像も本校とは異なり、N高等学校の生徒は高校卒業資格の取得以外にも何かしら目的を持って入学している生徒が多く感じられ、学校行事や体験活動も活発になっているようだった。さらに私学だからこそ、N高等学校だからこそできることが多く、実際に取り入れることは難しいと感じる。小さなことだが、Q&Aの作成などは、本校にも取り入れられることであり、学習のしおりに入れるか、Q&Aの冊子を作ることにより、電話での対応等が円滑になるだろう。

## 6 平成 29 年 9 月 21 日（木）神奈川県立綾瀬西高等学校訪問報告

### 【学校の概要】

1983 年創立。「自律協働」を校訓に豊かな知性と人間性を養い、心身共に健康で、協調性と実践力に富む人材の育成を目指している。平成 29 年 5 月 1 日現在、1 年生が 10 クラス、2・3 年生が 9 クラス、計 922 名が在籍している。

平成 26 年度より現行の高等学校教育課程の基準によらず、弾力的な教育課程を編成し、障害やその可能性のある生徒の指導方法を研究する「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育研究開発」に取り組んでいる。

### 【通級による指導について】

- 高等学校における個々の能力・才能を伸ばす個別支援教育研究開発事業を 4 年にわたって行っている。生徒の自尊感情等に配慮し、「通級指導」という名ではなく、「個別の授業」「領域の授業」「リベラルベーシック」など、生徒が親しみやすい名称で指導を行っている。
- 対象生徒は「学習のつまずきが大きい」「コミュニケーションに難しさを抱えている」「発達障害等の診断を受けている」といった基準を設け、「生徒プロフィールチェック表」（以下「チェック表」とする）を用いて 3 段階にわたって選出している。チェック表を授業担当者等が記載（第 1 段階）、提出されたチェック表をもとに、校内委員会である研究開発会議（担任や教科担当者も含む）で見極めを行い、候補者を選出（第 2 段階）、特別支援の領域に明るい教員や研究開発会議メンバーによる面談を 2～3 回行い、生徒自身の困り感への気づきの有無やその内容、将来の展望等の話をする中で、通級による指導を受ける意思を確認、保護者にも意思を確認し「個別の学習支援希望書」を提出（第 3 段階）。本人・保護者に十分な説明を行ったうえで、対象生徒を決定している。
- 11 名の教員が通級による指導の領域を担当している。特別支援学校に勤務した経験のある 3 名が加わり、授業内容の相談等を行いながら授業を展開している。また、個別的な支援・指導経験が多い教員や実習指導経験の多い教員を配置している。
- 生徒の実情・特性に合わせて、コミュニケーション能力の向上や自他の特性理解を進めることを目的に、基本的に 2～4 名の少人数制集団指導で授業を実施している。
- 通級による指導では、社会参加に必要な基礎学力（国語・数学・英語）の向上を図り、自己の良さや特性を理解・活用できる能力を高める指導、ソーシャルスキルの要素を含め社会的自立や社会性の獲得・生活能力の向上を図る

指導、職業選択や職業生活を営むために必要な能力を高める指導を行っている。国語では、自身が興味・関心のある内容の調べ学習と他者の前での発表を繰り返し実施している。数学や英語では生活に密接した内容を取り扱うようにしている。調べ学習などでタブレット端末のアプリ機能を活用している。

- 夏休みや試験期間等を利用して実習を行い、通常授業の期間に当たる場合は、公欠扱いとした。実習先については、特別支援学校で社会自立支援員として活躍されている方に依頼した。社会自立支援員の方が実習先の開拓から調整までしてくださるので、職員は非常に助けられている。実習に関して生徒からは「とても良い経験ができた」「働く大変さがわかった」「休息の取り方等学ぶことが多かった」などの感想が得られている。
- 個別の指導計画については、通級による指導で実施している領域について評価票としての機能も併せ持った独自の書式を作成している。評価については、授業を担当する全ての教員で会議を行ってその妥当性等を話し合い、数値ではなく文章で行い学期ごとに本人・保護者へ渡している。目標の達成度等を、生徒の自己評価を踏まえながら具体的に確認し、達成度に相当する単位の認定を行っている。
- 生徒からは「発表は緊張するけれども、この授業はいろいろためになっているから将来に活かせると良い」「自分のしたい仕事を見つけて、どう進むかをもっと考えたい」など前向きな言葉が聞かれている。対象生徒5名中4名は進路先を決定することができた。

### 【学習における工夫】

- 「放課後学習サポート」という名称で教科担当者と外部支援者である「学習支援員」が協働して週1回1時間程度の補習を実施している。通級による指導の対象でない生徒も継続的に学習支援を行うことができている。一斉指導でも学習支援員を配置し、つまずきの多い傾向にある理数系科目や英語、世界史等の授業で机間指導を行っている。生徒からは「話しやすく聞きやすい」「丁寧に教えてもらっている」という反応があった。教員とは違う存在の学習支援員が、生徒と教員との架け橋になるケースもあり、成果がみられる。
- 掲示物の場所を制限し刺激を少なくする、プロジェクタースクリーンを全教室に配置するなど、教室環境のユニバーサルデザイン化を行っている。

### 【課題】

- 対象生徒の選定に難しさを感じている。対象生徒がいじめやからかいの対象にならないように最大限配慮している。



- 通級による指導の対象生徒以外にも、自己肯定感や自尊感情が低い生徒が多く在籍している。障害等の診断はないが、学習についていくことが難しい生徒や、視覚的構造化がなされた内容の方が理解しやすい生徒も多い。通級する生徒以外にも、通級指導的な指導・支援を充実させていく必要を感じている。
- 対象生徒が自身の障害や特性に気が付いていないケースや、目の前の友人が障害やサポートが必要な特性があることに気が付いていないケースもある。
- 「障害」や「通級」という言葉に関して、まだ地域社会の理解が進んでいない現状で、対象生徒以外の生徒及びその保護者、地域住民に今後どのように通級による指導に関して説明するか。
- 大学等進学先との情報共有や、就職後の職場訪問等、進路先とどこまで、どのように連携できるか。
- 校内の教員配置人数や使用教室の関係で、対象生徒個々のニーズに十分には応えきれていない。

### 【まとめ】

通級による指導を先行して実施し、大きな成果を挙げられていることに感心した。取組の充実ぶりから、先生方の苦勞と並々ならぬ努力が伝わってきた。通級という安全・安心な場で様々な体験を積み重ねることで、生徒の自己理解が進むとともに自己肯定感が高められていると感じた。

「通級による指導に当たっては、担当教員に過重な負担が生じないよう、関係機関と連携するなどの工夫が必要である」「教員間の研修の充実により、生徒に有益な支援が行えるようになった」など、参考になる言葉がたくさん得られた。

高等学校ではこれまで行っていなかった通級による指導について、苦勞を重ねながら、大きな成果を残してこられた先生方に敬意を表するとともに、忙しい中、温かく対応してくださった先生方にあらためてお礼を申し上げたい。

## 7 平成 29 年 10 月 12 日（木） サイバー大学（東京オフィス）訪問

### 【学校概要】

学 校 名 : サイバー大学  
大学設置/創立 : 2007 年  
学 校 種 別 : 株式会社立  
設 置 者 : サイバーユニバーシティ株式会社  
本 部 所 在 地 : 福岡県福岡市東区香椎照葉 3 丁目 2 番 1 号 シーマークビル 3 階  
キャンパス : 福岡キャンパス（福岡県福岡市）  
東京オフィス（東京都港区）  
学 部 : IT 総合学部

### 【説明概要・感想】

- サイバー大学は日本で初めて設立された完全オンラインの大学であり、一般の大学とは異なる学びの仕組みが数多くある。在籍している学生は 2000 人程度、20～40 代が 7、8 割を占めており、また全学生の 6 割程度は社会人である。完全オンラインなので、一度も出席せずに卒業することも可能である。「IT 総合学士」はこの大学でしか取得できず、IT とビジネス、両方の視点と知識・技能を兼ね備えた「高度 IT 人材」の育成を目指している。
- 基本的な学びの流れは、動画を視聴し、小テスト、ディベート、レポート等の課題をクリアしながら、学期末試験を受けるというものである。単位修得のための最低合格点が存在し、定められた動画の視聴時期を逃すと、遅刻扱いとなり出席点が減点される。この制度を導入してから、受講率がアップしたという。小テストに関してもガイドラインが作られており、良い成績を収めるためには生徒がしっかりと取り組まなければならない仕組みが作られていた。本校の場合、受講率やレポート提出率を上げるために、何かしらの期限を設けることは難しいが、ある程度成績に反映させることにより、生徒の取り組みも活発になることが期待される。
- 大学で使用している動画コンテンツは担当する教員が作成している。動画画面は「パワーポイント等の資料」と「教員の顔」で構成されている。動画作成にはガイドラインがあり、以下のものが含まれる。
  - ・ひとつの動画は 15 分± 5 分まで
  - ・スライド 1 枚で説明は 1 分～ 2 分
  - ・スライド 1 枚に載せるポイントは 2 点まで

- ・文字の大きさは 32p 以上
- ・文字だけのスライドにならないように図などを挿入。その際、著作権に注意
- ・本時の目標と、最後のまとめは必ず入れる
- ・授業内容のレベルの設定

こういったガイドラインに沿って作成され、その後はコンテンツ制作センターに属するインストラクショナルデザイナーと呼ばれるスタッフが、動画のチェックを行う。何度かやり取りした後、動画は完成する。動画更新のサイクルは科目によって異なる。平均して 3～4 年で更新するが、毎年更新するものもあるし、一部のみ更新することもある。動画制作のためのガイドラインの作成とチェック体制に関しては、本校の今後の IT コンテンツの作成において必須である。またレポートの作成に関しても各教科で難易度等にばらつきがあるため、ガイドラインの改定を見直しても良いかもしれない。

- 通信制大学ということで学習の習慣化が難しい中、1 年次の必修科目の中に「学習の習慣の付け方を教える授業」を設置した結果、大きな効果があったという。また、同じく必修科目の中にネチケット等を学ぶ科目を設置し、ネット上でのトラブルを未然に防ぐようにしている。学習の習慣づけは通信制教育における大きな課題の一つである。学習に対するモチベーションを維持させるために、NHK 高校講座やこれから作成される IT コンテンツをうまく活用していきたい。
- 入試は志望動機の作文のみだが、あまりにも書かれている内容が大学の目指しているものとかけ離れている場合は面談を行い、結果不合格となる。
- 様々な仕組みや取り組みを聞くなかで、「完全オンラインであるからこそ学びの質を保つ」という大学側の気持ちを強く感じ取れた。

## 8 平成 29 年 10 月 26 日（木）神奈川県立田奈高等学校訪問報告

### 【概要】

#### (1) クリエイティブスクールについて

平成 21 年度に田奈・釜利谷・大楠の 3 校が指定され、平成 29 年度から大和東・大井高校の 2 校が加わり、現在、神奈川県内には 5 校設置されている。入学者選抜では学力検査を課さず、調査書や集団討論など各学校が独特の方式で行っている。入学してくる生徒には、人間関係のつまずきや不登校を経験した者、障害を有する者が多い。

田奈高校では、小中学時の学び直しから始め、社会で必要なコミュニケーション能力をはじめとするソーシャルスキルを身につけさせ、生徒の自己有用感を高めることを学校のミッションとしている。「対話」を基軸とし、指導よりも支援に重きをおく形で生徒と関係を作ってから指導に当たるようにしている。

#### (2) 田奈高校の概要

学年は 1～3 年どの学年も 8 クラス、1 クラスは 30 人以下で編制されている。本校と同じく、生徒は県内各地から通学してきている。教員数は再任用教諭を含め、50 数名である。養護教諭が 2 名配置されていること、生徒指導強化のため定数加配が行われているのが特徴である。

スクールカウンセラー（SC）は週 1 日、スクールソーシャルワーカー（SSW）は週 2 日、スクールキャリアカウンセラー（SCC）は週 4 日勤務、多文化教育コーディネーターは英語非常勤と兼務（30～40 名が外国につながる生徒）している、部活動インストラクターが 9 名配置され、業務アシスタントも週 4 日勤務している。

#### (3) 入学者の状況・生徒指導件数

年々、学習につまずいている生徒が増加している傾向があり、とくに英語と数学の成績が低いため、入学後に手厚くフォローするようにしている（英・数は 1 年生と 2 年生の間、30 人学級の半分・15 人で授業を展開）。

特別指導件数はクリエイティブスクールになって以来、減少傾向であったが、直近は増加している（年間 100 件程度）。生徒指導件数が増加しているのと同様に、1 科目でも単位修得が危ぶまれる出席不足の生徒（総出席数の 4 分の 1 以上を欠席した者）が今年度は 2.5 倍以上となり、体育祭の欠席率も 7.4%（クリエイティブスクールになって以降の平均は 4.98%）と高くなっている。昨年度、定員割れを起こしたことが要因の一つと考えられる。退学者の数も減少傾向にあったが、平成 28 年度は 8%と増加（27 年度は 4%）し、変化が著しい状況となっている。

問題行動の背景には障害などによる特性があることが多いとの認識に立ち、生徒の詳細な情報収集に努めている。特別指導に係る問題は 1 年生の夏休み前に発生することが圧倒的に多い。案件としては、「指導無視」「暴言」「SNS によるトラブル」「タバコ」が多く、バイク乗車は少ない。

#### (4) 近年の学校の状況と取組み

昨年入学した現 2 年生で小中学校のいずれかの時期に不登校を経験していた生徒<sup>※</sup>

は何とか高校生活1年目を乗り切ってくれている。近年は、発達障害等の生徒・外国につながる生徒・基礎学力不足の生徒・何らかの疾患を有した生徒が増加し、家庭の経済困窮度の強まりもあり、その養育力も低下している。

※不登校の生徒の数は、長欠申請や中学校への問い合わせに加え（入学者全員について中学校訪問もしくは電話で情報を収集）、入学直後（4月）に三者面談を実施した中で得た情報をもとに算出している。

#### (5) 生徒の家庭状況

障害受容のない家庭や1人親の生活保護世帯が多く、その中には精神疾患を抱える方もいる。給付金等の書類を記入することが難しいため、区的生活支援課やケースワーカーに書類の作成などを手伝ってもらっている。修学旅行に行くため・進学するためにアルバイトをしようとするも、生活保護の額が減ることなどを警戒して保護者の許可が得られない場合や、稼いだお金を生活費に使用してしまう保護者がいる。また、毎年2・3件、生徒の申し出から児童相談所へ報告する事態が発生している。卒業・就労に際して、世帯分離して親と別居させることもあり、その際は、緑法人会（中小企業経営者の会）の協力で、生徒の住まいを用意してもらっている（敷金・礼金は緑法人会が拠出）。

#### (6) 校内資源の活用・工夫

司書教諭と連携し、図書室で地学（惑星を模写し特徴をまとめるレポートを作成）や英語（自分が興味を持った国を調べてレポートを作成）などの授業を行っている。当該授業までに司書教諭は授業に必要な本を近隣の学校から取り寄せてくれている。また、図書館を飲食可能なカフェとしても活用している。

#### (7) 外部資源の活用（NPO・横浜若者サポートステーション・学生ボランティア・大学院・横浜市・スクールキャリアカウンセラー・法人会）

関係機関とのやりとりは多い時で月20数回もある。

NPO法人パノラマの力を借りつつ、図書館を昼休み・放課後にカフェとしている。学校の相談室で青少年若者サポートステーションの方が個別相談を受けていたが、相談室に来室するのは抵抗感が強いため、気軽に話ができるカフェを開くこととした。このカフェで教員・生徒が会話し、関係を築いて相談につながる循環ができた（カフェの会話の中から気になる子を見つける⇒カフェが相談につなぐ入口となっている）。一度つながると、卒業後もサポステとの相談が継続できるため、有意義な取り組みの1つとなっている。

サポステからは現在も月2回スタッフ1名が出張相談に来ている。

大学生等のボランティアを活用し、放課後補習のシステム（田奈ゼミ）を設けている。多い時は30人以上の生徒に10数人のボランティアが対応していた（生徒3：ボランティア1）が、近年、ボランティアが集まらず、システムを維持するのが困難な状況となっている。

早稲田大学の大学院教授（高橋あつ子氏）と連携し、学習のアセスメントを実施している。それによると、田奈高校の生徒は視覚優位の生徒が多い（6～7割）ことが

分かった。しかし、視聴覚教材の常駐は難しく、機材は不足している状態である。

平成 27 年より横浜市の生活困窮者自立支援制度を活用し、経済困窮の家庭・本人を支援している（介護職員の初任者研修を無料受講、専門学校に通う費用のない生徒に、保育士としてアルバイトできる場所を提供し、資格取得を支援）。また、横浜市健康福祉局の就職準備支援事業を活用し、介護職を希望する生徒の初任者研修を無料で受講でき、また、同市の少年育成課と連携し、卒業した生徒を認可保育所でアルバイト（2 年間以上かつ 2880 時間以上、正社員並みの勤務）することで保育士の受験資格を取得できるようにしている。自治体と連携することで、経済的に困窮している生徒も希望の進路に就くことができるようになった。

スクールキャリアカウンセラー（S C C）を常駐（週 4 日）し、進路指導を行っている。本来は 4 日勤務だが、ご好意により週 5 日出てくださることもある。どの業種・企業・職種が本人に合っているか、膨大な企業情報を持っている S C C の役割は非常に大きい。様々な課題を抱えた生徒の特性を理解し、丁寧なマッチングをした後、就職へつなげている。生徒の状況によっては、バイターン（アルバイト体験）を勧めたりすることもある。

公益財団法人緑法人会（中小企業数千社の経営者の集まり）の協力を得て、1 年生のうちに全員をどこかで 1 日職場見学体験を実施している。60 の事業所が見学を受け入れ、緑法人会がとりまとめを行ってくれている。

#### (8) 進路指導（青春相談室「田奈 P a s s」）

上記の職場見学に加え、専門家を招いてのマナー研修や職業インタビューを行い、1 年次から進路を強く意識させる指導を行っている。3 年次には HR で「さくら咲くキャリア教室」への参加を呼びかけ、職場見学を行ったり O B ・ O G のもとを訪ねたり、封筒のあて名書きやメモの取り方の練習など、より実践的な指導を行っている。毎回 20～30 人が参加して就職スキルを高めている（学年の 10 分の 1 程度。卒業生の半数が就職という実態を考えると就職希望者の 5 分の 1 程度が参加）。

また、スクールキャリアカウンセラー（S C C）と連携して S S T を実施したり、教員と情報を共有し、支援の計画を策定している。就職先に本人の特性を理解してもらえるように、在学時にできるだけ手厚く支援を行うことを心掛けている。

家庭や本人の状況によっては、横浜市の保育プログラム・介護プログラムを利用し、本人の望む進路がとれるようにしている（専門学校へ進学する費用がない生徒も、保育士・介護士になれるよう横浜市が支援・協力）。

#### (9) 田奈高校のスクールミッション

高校入学まで「できなかった」経験が多く、自己肯定感が低い生徒に「できる」喜びを経験させ、「生徒を頑張る気にさせる・意欲を高めること」を田奈高校のミッションとしている。生徒自身が充実感・できた実感のある授業を行い、学習内容も厳選しているが、教員全員にその理念を共有することが難しい状況である（できる実感を重視するあまり、高等学校の学習内容になっていないのではないかとの批判もある）。

#### (10) 進路状況

進路状況は就職が約半数、大学短大等が10～15%程度、専門学校等が20～25%、その他が20%程度となっている。就職を増やし、その他を減らすことを目標としている。

生活困窮世帯の生徒には、無理に大学・短大等への進学を勧めないようにしている。進学費用が用意できているか、アルバイトの許可が下りているのかなど、区役所（ケースワーカー）と適宜連絡を取りながら、進路指導を行っている。

#### (11) 学校行事

生徒に成功体験を積み、自己有用感を高められるよう、教員が細やかなサポートを行いながら生徒主体の学校行事を行っている。体育祭は1週間前から授業をカットし、球技大会は年2回3日間行い、有志による駅伝大会は毎年200人くらい（在校生約600人）の参加がある。

修学旅行は10月に北海道へ3泊4日で行っている。欠席者が30人にのぼることもあり（学年の約8分の1・各クラスに3～4人）、行き先や期間を再検討することも考えている。

昨年、体育祭の欠席率が上がり、文化祭の来場者数が減少していることから、よりよい学校行事を運営できるように考えている。

#### (12) 年3回の3者面談

3者面談を年間3回（4月・9月・1月）実施している。面談期間は短縮授業とし、午後の時間を面談に当てている。早めにかつ複数回面談を行うことで、成育歴や家庭状況を詳細に知ることができ、進路についても丁寧に話を進めることができている。

### 【田奈高校職員からみた自校の課題】

#### (1) 外部機関との連携（専門性が必要）・教員間の意識の差・校内のコンセンサスの確立

生徒の困難が見えると、学校がやらなくてはいけないことが増える。本来、SSWがやるべきことを教員がやらなくてはいけない状況がある。障害や特性から就職時につまずく生徒が多いため、早めに支援の必要な生徒を見つけ出すようにしているが、教員によって支援の必要な生徒を見つける能力にばらつきがあり、卒業学年になってようやく支援が始まることもある。教育相談コーディネーターを各学年に1人配置するなど、支援が必要な生徒を早期発見できる体制づくりをしてきたが、教員の入れ替わりも激しく、体制を維持することが難しくなっている。生徒の自己有用感を高めるという目標を全体で共有する体制を構築したい（小中学校で学習につまずき、就職希望の生徒が半数いるなかで、大学入試を意識した授業を展開しても実態にそぐわない。社会に出た際に役立つ知識・経験を授業の中でいかに教え・積ませるかを共通理解としたい）。

#### (2) 情報の引継ぎ

小・中・高の情報の引継ぎがなかなかうまくいかず、生徒の実態をつかむのに時間がかかることがある。中学校でも生徒情報は教えてくれるが、家庭の情報は教えてくれないなど、学校によって対応に大きな差があるということだった。

### (3) 継続した外部資源の活用

学生ボランティアに頼った補習システムは、ボランティアということもあって人員の確保が難しい。近隣の大学にボランティアの実施で単位認定を行うなどの要請をしている。

### (4) 視聴覚機器の不足

視覚優位の生徒が多く在籍している実態に応じて、機材を充実させていく必要がある。

## 【横浜修悠館に活かせる取組み】

### (1) 詳細なデータ収集（入学者のA値、出席不足の生徒、生徒指導件数など）

「本校の実態を把握し、適切な指導・支援のあり方を検討する」「外部に向けて本校の特色を発信する」には、数量化できるものはきちんと数量化（視覚化）することが必要である。すでに行っているものもあるが、データ収集するとよい項目（収集すべき項目）を職員全員で検討し（組織的な取り組みをするのにグループのみで考えるのはよくないと考える）、今からでもデータをとって、変化の原因・現状などを詳細に分析する必要があると考える。

### (2) 法人会や自治体との連携、自治体の制度・SSWのさらなる活用（予算措置）

本校も様々な外部資源を活用しているが、近隣の法人会や自治体との連携をさらに密にできるとよいのではないかと感じた。ケースワーカーや児童相談所との連携もすでに行っているところであるが、生徒や家庭の実態に応じた適切な支援を実施できるように、本校のような生活困窮世帯の多い学校には、SSWを常駐させられるような仕組み（予算取り）が不可欠であると、今回改めて実感した。

### (3) 中学校からの情報収集・早めの三者面談の実施

入学者全員に対して出身中学校を訪問する、もしくは出身中学に電話で情報を収集することは非常に有意義な取り組みであると感じた。本校は在籍生徒も多く、全員について電話をすると料金も莫大なものになるかもしれないが、一考の余地はあるのではないかと感じた。三者面談については、来てくれない保護者もいるだろうが、生徒の成育歴や家庭環境を早めに知り、丁寧な進路指導を行うよい機会になると考える。

### (4) 30人学級（少人数学級）の実現

本校には、学校に通えない生徒が半数近くいる現状がある。言うまでもなく、学校に通えている生徒と通えていない生徒への支援は大きく異なる。学校に来られている生徒へは進路指導をはじめとする支援を、学校に通えていない生徒へは面談を設定するなどの支援を行う必要がある。そのためには、1クラスの人数は20～30名が適切である（そうでないと支援が行き届かない）と考える。

### (5) 学校行事の活用

本校では行事の準備と学業の並行をこなせる力量のある生徒が少なく、学校行事はトラブル発生の要因ともなるため（おまけに家計の負担も増えるため）、学校行事を制限してきた経緯がある。有志でも構わないのでより充実した高校生活を送れるよう、



機会を提供してもよいのではないかと感じた。

### 【感想・所見】

視察した当日は、文化祭を控えて生徒は全日準備をしていた。文化祭ムード一色で、学校全体が活気にあふれていた。頭髪が派手な生徒が多数いたが、多くの生徒が明るい表情で気さくに挨拶をしてくれ、学校の様子が何となく理解できたような気がした。他校の生徒を見ることで、あらためて本校の生徒の特徴を実感した。

各学校には特色があり、在籍する生徒の実態に応じて適切な指導・支援を行い、成長を促して次のステージへ送り出すことが学校に与えられた最大の使命であると考えます。学校だけで解決できない課題も多くあり、関係機関との連携は不可欠な状況となっている。

各関係機関には、それぞれの強み・弱みがあり、各機関の弱みをカバーしあうことで、細やかな支援体制が構築できるものと考えます。そのためには、関係機関との調整が不可欠である。SSWが常駐する必要がある学校にはきちんと常駐できる仕組みを整え、とともに、SSWの専門性を多少なりとも教員が身につける必要があると思われる（年次研修を行うのであれば、福祉資源・自治体の福祉制度についての研修をもっと充実すべきであると考えます）。

最近、トライ教室に教育相談学習支援グループの担当以外に、担任の先生方が多く来てくれている。そこから気づいたことだが、トライ教室は学習支援よりも教員と生徒の関係づくり・コミュニケーションの場として大きく機能している。ゆったりとした時間・空間のなかで、学習を通じて生徒と教員のコミュニケーションが持たれ、良好な関係が構築されている。YSKサポーターの力も借りつつ、担任がもっと生徒に関わる仕組みを構築することも大切なのではないかと実感している。

学校視察を経て、早期発見・早期支援、早めの進路指導（充実した進路指導）が必要であるとの認識をあらためて強くした。学校に通うのが精一杯という生徒がいる中で、どこまで刺激を加えるか。詳細なデータを取りつつ、職員全体で本校のスクールミッションや指導・支援体制をどう整えていくのか、まずは目標・課題を共有し、それを達成・克服する知恵を出し合う必要があると思った。

## 9 平成 29 年 11 月 15 日 NHK 学園高等学校訪問

### 【概要】

- 1963 年、日本初の広域通信制高校として開校。
- H28～H30 文部科学省より委託「広域通信制高校における支援・相談体制の全国展開及び本校専攻科を活用した大学編入等を可能にする進路実現への取り組み」を受けている。
- 近年、入学生徒の質が変化し、若年化・個人の資質に関わる課題の顕在化という新たな課題が明確になり、通信制の在り方が変化した。
- 通信制に対する国からの助成は、全日制・定時制に比較して少ない。生徒の登校日数が少ないために、必要性が国にあまり認知されていないためだと考える。
- 全国の私学の通信制は、半分近くが転学。NHK 学園はそこまでではないが、転入生は多い。
- 職員を毎年各 2 名、校内の養成課程で社会福祉士 (SW) にしている。現在 6 名が資格を取得した。養成した教員が SW としての活動に専念しているわけではないが、通信制の教育課題に対応するためのスキルを校内で普及させることを目的としている。
- 学校心理士 (臨床心理士とほぼ同様の職務) についても、2 年間かけて 1 人養成している。
- 特別支援学校の教員は、パニックになったり暴れたりしている生徒に対する対応がとてもうまい。そのため、特別支援教育の免許を全教員に取らせたいと考えている。単に資格や免許を取らせるということではなく、そうした研修の過程の中で、通信制の課題に向き合う自覚が生まれることを期待してのこと。
- 生徒に卒業資格を与えることが通信制教育だと勘違いしてはいけない。学力形成をさせて、進路確定できるようにもっていくことが学校としての使命。
- 高校卒業後に引きこもりになる生徒も多く、卒業後に安定した人生が送れるような進路確定をさせることが学校としての課題。
- 進路確定の一助として SC・SSW が必要。
- 学校所属の SSW だからこそ、教員と信頼関係を作り、学校の課題と向き合うことができる。
- 私学なのでパンフレット等は広報的手法を意識している。

### 【SSW が実際に関わった具体例】

- ①不安定な生徒についての情報が養護教諭からあり、SSW につなげた。  
1 人親で、その親自身が統合失調症を罹患。親の不可解な言動を本人が耳にすることで、精神的に参ってしまっている。親は通院や服薬が困難なため、親・生徒・SSW の 3 人で病院に行く。その後、訪問看護を受けられるよう環境調整した。
- ②電車賃がなくて通学できずにいた生徒に、生活保護の制度の中に交通費の実費請求ができることとされていることを本人及び保護者に伝え、実際の請求までの手伝いを行った。
- ③就学支援金についての知識理解が、保護者自身に乏しいことが多く、支援金申請書類への記入から提出まで案内した。
- ④発達障害の生徒同士のトラブルが発生した際、ソーシャルスキルに難があることから、

伝える練習をチームで実施した。

- ⑤統合失調症に罹患している生徒の様子に変化を感じたとき、保護者に確認の上、主治医に学校での様子を伝え、しばらくは登校より休養が必要ではないかと保護者へ伝えた。
- ⑥大学等への進学を希望する保護者及び生徒へ、学費確保の方法についての説明を行った。
- ⑦発達障害等の受容が困難な場合、説明を行った。
- ⑧障害のある生徒に向けて、就労支援に繋がる必要から、在学中にインターンシップを行った。
- ⑨障害の受容が難しいケースについて、説明を行う。
- ⑩教職員に、実際に起こっているケースを伝え、その中で各種福祉制度について知ってもらう。
- ⑪教職員の負担を考え、記録はメモでも構わないことや、立ち話でミニケース会議を行うなどの簡略化を行っている。また、職員会議でケースを報告することもある。

### 【レポート】

- シラバス作成に当たっては、放送視聴を軸に行っている。放送の予定日時・範囲を前提にした年間スケジュールの設計をしている。
- 教科書、学習書、レポートを使用。
- レポートの中身は、参考資料、練習問題、いわゆるレポート本体で構成。ひもときから課題へという流れを意識したものとなっている。
- レポートには必ず放送視聴した上でなければ解けないような問題が入れてある。
- TV そのものより NET で番組視聴する生徒が多い。
- レポートにはテスト対策として、学習内容のまとめ問題が入れてある。(この部分は提出免除)
- レポート提出や欠席について、担任が把握して電話での指導や呼び出し、必要に応じて家庭訪問を行っている。私学なので徹底している。

### 【eラーニングについて】

- 2003 ホスティングスクラッチ開発
- 2011 専用ホスティング
- 2016 クラウド(サーバー不使用)
- 既存のソフトをカスタマイズしている
- レポート学習の添削、提出をオンライン化
- 学習コンテンツは自校教員による内製
- 解答方法の多様化(選択式、記述式、論述式)
- 選択式、記述式については即時添削、フィードバック可能
- 学習進捗状況の確認可能
- 成績管理画面には、再提出の通数、未提出の通数、今年度全体の(全ての科目の全ての通数)中の何%程度実施済みかといった、視覚的表示も出るようになっている。
- 締め切り表示、添削待ちの表示もある。
- NHKのTV・ラジオ講座を、実際に視聴しないと解けない問題や仕組みがレポートには埋

め込まれている。

- ネット授業を実施（リアルタイムまたはオンデマンド）
- 授業の動画は、パワーポイントで作成している。（教科担当者の顔も小さく同時に表示している。）
- 動画は授業範囲についての動画であって、レポートの答えを直接見られる類いではない。
- スカイプを使った教科担当者への質問も可能。
- 現在は、ネット学習4：登校コース6の割合
- ネット上に掲示板があり、生徒（複数）・教員相互間でチャットのやりとりが可能
- ネットHRも実施（海外在住の生徒もいるため）
- 教員によって、動画作成の力量や興味関心が大きく異なるため、現在は、テンプレートを設定してその枠の中での作成を義務づけている。

### 【その他】

- 高卒求人による就職は20名程度。
- 就学支援金の制度の影響で、以前ならば私学に入学できなかったような経済的階層の家庭からも入学するようになっている。生活保護家庭ならば、自己負担額はほぼない。
- 通信制高校の社会的な評価の向上が必要で、そのためにも全通研などでも働きかけを強めたい。

### 【感想及び提言】

- 大変に実りが多く、先方が好意的に接して下さったので、充実した学校視察になりました。
- 学校全体の概要にあまり時間をかけることなく、SSW及び動画による指導についてを中心に、話を聞かせていただきたいと依頼しました。SSWの活用事例を多数知ることができ、今後の本校の実践にも役立てられると思います。SSWが教職員と協力して学校の課題に対応するという基本姿勢についての話は、見習うべき点が多いと思います。
- 人材育成という点では、神奈川県として、SW・カウンセラー・特別支援教育コーディネーター等の資格を、教員が取得できる機会を検討していただくことはできないでしょうか。
- 動画での指導については、NHK学園も生徒の学力形成を促すことを主眼としている点に、改めて気づかされました。動画を見て解答を単に写すような形は不可で、学習内容を理解させ、そうした努力に基づくレポート学習という大きな流れを教育論として据えているからこそ、実り多い、動画での学習サービスの展開が可能になったのだと思います。動画学習のユニバーサルデザインを意識して、テンプレートをあらかじめ設定しておくなど、本校が立ち止まって考えるべき具体的なヒントも多数見受けられたように思います。
- 全体を通じて、通信制高校の在り方、あるいは存在意義そして教育論、教育哲学について非常に熱い思いをもって教育にあたっていच्छることが伝わる、大変有意義な時間を過ごすことができた学校視察になりました。

1 ポスター発表原稿(参加申し込みの際に提出)

「高等学校における通級による指導」制度化に向けた通信制高校での実践  
— 自立と社会参加を目指す学校設定科目「キャリア活動Ⅰ・Ⅱ」 —  
○小俣 弘子 立川 直之 山田 佳典  
(神奈川県立横浜修悠館高等学校)

I. 課題と目的

義務教育終了後のほぼ全ての生徒が進学する高等学校における特別支援教育体制の整備と支援の充実は非常に重要である。昨年、高等学校における「通級による指導」について平成30年度から導入する方針が示された。

「通級による指導」に関しては、平成21年8月の「特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議高等学校ワーキング・グループ報告」において「将来の制度化を視野に入れ、種々の実践を進める必要がある」、また「発達障害のある生徒の自立にも資する教科・科目を開設し、これを選択科目として位置付け、通級指導教室のような形態で実施することも考えられる。」と示されていた。

A通信制高校は平成21年度に文部科学省の「高等学校における発達障害支援モデル事業」に取り組んで以来、発達障害等困難のある生徒を対象に「自立にも資する」科目として「キャリア活動Ⅰ・Ⅱ」を開講し、「通級指導教室のような形態で」実施してきた。

通信制高校は発達障害等困難のある生徒の在籍率が全日制に比べ相対的に高く、本校の生徒の中にもコミュニケーションや対人関係に課題がある生徒や、文字を書くことや計算など学習に苦手意識を持つものも多い。これまでいじめやからかいを受けた生徒、不登校の経験者、ひきこもりがちで社会経験が乏しい生徒、精神科医療にかかる生徒、昼夜逆転に近い生活を送る生徒もいる。

今次の発表では、対象校より掲載の同意を得、いわゆる「登校型」の学習形態を持つ公立通信制高校での実践を報告し、「自立に向けた準備期間を提供することのできる最後の教育機関」における「通級による指導」の在り方を検討することを目的とする。

II. 方法

「通級指導教室」的な機能を有する場として、以下のことに留意した。

学校設定科目「キャリア活動Ⅰ・Ⅱ」

- ◇通常の学級とは別の学習室を使用  
→安心できる環境・居場所
- ◇週1時間の講座と年間6~7回の体験活動  
→将来の社会的・職業的自立を意識
- ◇少人数をチームティーチング、個別指導

初年度は「キャリア活動Ⅰ」を、翌年、続けて履修する生徒向けに「Ⅱ」を設定した。以後7年間でⅠとⅡで計12講座を開講した。

## 《対象生徒》

発達障害等困難のある生徒、教員間で「気になる生徒」、支援が必要と思われる生徒、受講を希望する生徒・保護者に、説明会と面談を実施し、本人と保護者の意向を確認した。

## 《指導内容》

「自立と社会参加」を目標とし、「コミュニケーション」「人間関係」「自己理解」「いろいろな仕事」「働く」「社会人としての基礎力」などをテーマに、受講生徒の実態や状況により内容や方法など柔軟に対応している。

## 《週1時間の講座》

A校は単位制の高校で、生徒ごとに受講科目も時間割も異なる。「キャリア活動Ⅰ」では、まずは生活リズムを整え毎回休まず遅れずに参加することを第一の目標として、月曜1時間目（「Ⅱ」は火曜1時間目）に設定した。

生徒は週1回、通常の教室とは別の学習室に登校し、講座は一人ひとり身近な出来事を発言し合うことからスタートする。

各回の教材として市販の書籍・ビデオ、インターネットを活用するほか、特別支援学校の進路学習や就労移行支援事業所のプログラム等を参考に自作のプリントを用意した。

実際の指導場面では、その時々生徒の反応によって発展することも、押さえておくべき課題が見つかることもある。単にプリントを完成するのではなく、生徒の発言を引き出し、お互いの意見を聞き、考える場面を設けるよう心がけている。

講座の最後に振り返り用紙に記入するが、これはインターンシップにおける日誌や職場での日報を意識したものである。

そして1時間の居場所的な講座のあと、それぞれ通常の学習教室へと向かっていく。

## 《体験活動（年6～7回）》

教室での学習だけでなく、作業や体験活動を積極的に取り入れ、地域や社会とのつながりの中で学ぶことを重視している。

校外の資源では、特別支援学校、企業や福祉施設、相談機関等、多方面の協力のもと連携して指導にあたり、作業学習や職場見学、職業体験など実際的な場面での具体的な体験を設定し、活動の前後にSSTを含む事前・事後学習を取り入れた。

その他、文化祭での生徒による発表や、講座の先輩である卒業生との交流などを行った。

## Ⅲ. 結果

### 《受講した生徒について》

○7年間で44名の生徒が受講し、42名が単位修得にいたった（Ⅰ・Ⅱで、のべ63名）。

○1講座あたりの生徒数は4～11名である。

○男女比は7：3で男子が多かった。

○年齢は（本校は学年がない）16～23歳で、17～18歳が多かった。

○42名中34名（81%）が障害者手帳を所持し、うち療育手帳が24名、精神障害者保健福祉手帳が8名、身体障害者手帳が2名である。

○発達障害の診断がある生徒は約半数である。

○これまでに32名が卒業し、2名が退学（理由：就職、福祉施設入所）した。

○卒業後の進路先は就労が8名（障害者雇用を含む）、就労移行支援や就労継続支援等福祉

サービスを利用するもの 15 名、職業訓練校が 5 名、その他 4 名（アルバイト、進学準備、未定）である。

#### 《見えてきたこと》

- 個々の生徒の明らかな変化（自信、自己理解、自己肯定感、意欲、仲間意識など）。
- 安心できる環境と仲間の中で学ぶ効果。
- 本物を見ること、体験活動の意義。
- 「できる」「役割を果たす」経験の大切さ。
- 通常の学習活動（スクーリング出席、レポート作成等）への意欲と生活リズム。
- その後の個別のインターンシップや進路に対する生徒の主体的、前向きな姿勢。
- 教員側の気づき（生徒理解、特別支援教育の視点、キャリア教育の重要性など）。
- 関係機関との連携や地域資源の有用性。
- 通信制のメリット（時間的ゆとり、柔軟なシステム）と難しさ（生徒の把握、多様なニーズなど）。

#### IV. 考察

A校が県下全域の生徒が在籍する登校型の通信制の単位制高等学校であることから、通学の負担、生徒との関わりや通常の授業担当との連携、心理的な抵抗感、グループ指導のしやすさ、などの点では「自校通級」と「他校通級」の両方の特徴が見られた。

当初心配していた生徒の「心理的な抵抗感」については、A校が単位制で生徒それぞれ時間割が異なること、事前の説明会を受け自ら受講を希望した生徒であること、また小・中学校で通級や個別支援の経験のある生徒もいたこともあり、抵抗感は少なかった。生徒のアンケートでも概ね良い評価で、8割以上の生徒が引き続き2年目の受講を希望した。

むしろ、安心できる場での学びや、仲間と活動に参加し、具体的に「できた」体験や「人の役に立つ」経験を積み、認められ誉められることで自尊心や自己肯定感が増し、通常の学校生活だけでなく、将来の就労や社会参加に向けた意欲の形成にもつながった。

教員・生徒同士の対話や具体的な活動の中で、生徒は自己理解を深め、仕事や進路を主体的に考える契機になった。教員にとっても生徒理解がより深まり、個々の生徒に応じたその後の指導や進路支援に役立っている。

高等学校においては地域や学校ごとの実態、課程や学科の特色により状況は様々であるが、発達障害等の困難を抱える生徒にとって、社会への移行の最終段階である高校生段階における「通級による指導」の必要性と効果は高いと考えている。

**キーワード：通信制高校、通級による指導、自立と社会参加**

#### 2 参加報告

- [1] 日程 平成29年 10月8日（日）、9日（月）
- [2] 会場 栃木県総合文化センター

### [3] 概要

#### (1) 学会企画シンポジウム 9:10~11:00

「高等学校における特別支援教育—多様な支援実践から高校段階のニーズを考える—」

司会者 小野 次朗 (和歌山県発達障害者支援センター)

- ①話題提供者 岩田 聡 (京都府立田辺高等学校)
- ②話題提供者 比嘉 展寿 (沖縄県総合教育センター特別支援共育班)
- ③話題提供者 西村 優紀美 (富山大学教育・学生支援機構学生支援センター)
- ④指定討論者 柘植 雅義 (筑波大学人間系障害科学域知的・発達・行動障害学分野)

#### 【概要】

司会の小野氏からシンポジウム企画の経緯、特別支援教育の体制整備の流れについて説明があった。大学では「障害学生支援」として取組が先行しており、遅れ気味であった高等学校にも来年度からの通級の導入もあり、特別支援教育の広がりが見られるようになった。文科省モデル事業の高校、高校内の分教室、大学での障害学生支援室それぞれの取組から話題提供があった。

#### ①2014年度「個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」モデル事業4年目

- ・自立活動の指導：問題に対処する能力、社会性、コミュニケーション能力を伸ばす。  
体の動かし方や文章要約、箇条書きの仕方なども学んでいる。
- ・自立活動を7時間目・長期休業中に置くことによって生徒の自尊心を守ることができた。
- ・助かったこと：中学校から支援を継続するよう連絡を受けた。そのため、早くから手だてを考えることができた。こういった場合、高校で適応できることが多い。
- ・課題：障害の理解、進路先との連携、対象生徒の選定、教育課程に関わる生徒の負担、自立活動の指導内容の専門性の確保など

#### ②沖縄県の普通高校敷地に設置された高等特別支援学校分教室における実践

- ・体育・芸術はITで高校と合同で、商業科の教員が流通サービスについて指導
- ・行事・部活は合同で制服も同じ
- ・部活では、人間関係のトラブルが起こるが、社会性を学ぶ機会として生徒同士で解決するように指導。
- ・多様な交流と学びあい・ネットワーク資源を生かしていくことにより、相手を理解し、認める。個を受け入れる集団を育てていくとともに、みんなから認められる体験を大切にしている。

#### ③大学における障害学生支援の在り方

- ・障害生徒の支援の決定手順：入学前相談→支援会議→配慮内容の検討→実施→モニタリング
- ・障害学生自身の表明が大切である。(配慮が適切であったか)
- ・大学のHPにアクセシビリティ・コミュニケーション支援室をリンク。  
→先輩の体験談を学ぶ。(発達障害のある先輩のエピソード、勉強、特性、予防と対策)
- ・チャレンジカレッジ：高校生対象の体験プログラム。スケジュール管理などを学ぶ。

#### ④指定討論

- ・内容が濃く、このテーマで5時間ぐらいディスカッションしたいくらいだ。
- ・通級について放課後等デイサービスとの連携できれば、不登校生徒も出席可能となるか



もしれない。

- ・部活の主なトラブルは、高校生から「もっと一生懸命やれ」と分教室の生徒のやる気が感じられないこと。分教室の生徒は「がんばっているのに…」との声を聞く。
- ・発達障害の高校生対象の大学体験は面白い。高校とタイアップして行うことも検討できる。

### 【感想】

- ・サブホールの574席がほぼ満員であった。来年度から高等学校における通級による指導の運用が始まるが、関心の高さが感じられた。
- ・田辺高校の取組は通級を想定したものだが、対象生徒の決定、保護者・本人に通級への合意を図ることに苦慮しているという。通級の導入にあたってどの高校でも想定される心配だが、今後、実際に動き出すさまざまな高校通級での指導内容や指導を受けた生徒の変容、生徒自身の気持ちの変化といった成果が得られるかどうかにかかっていると思う。生徒にとって「確かに始めは抵抗があったが、やってみたら良かった」となるような通級であってほしいと思った。
- ・分教室は神奈川県で早くからの取り組みがある（養護学校の生徒増から緊急避難的に、当初、年数を限ってできたものだが）が、今回の事例は交流の度合いがより進んでいるように感じた。部活動や共同学習などでの多少のトラブルや新たな発見も含め、違いを認めつつ、学んだり、得ることが双方の生徒も教員にも沢山あるものと思われる。共生社会を目指す特別支援教育の一面が見える話題提供だった。
- ・指定討論の中で、学校と放課後等デイサービスの連携について言及があったが、本校にも少数ながら放課後等デイサービスを利用している生徒が在籍している。事業所の数も多く、それぞれのプログラムや利用者の様子もさまざまだが、今後、放課後等デイサービス事業所との情報交換や連携も視野に入れたい。
- ・①通信制では問題になりにくい、通級に通っていることが他の生徒に知られてしまうことや1年を通して単位数あたりの出席が必要であることなど問題があることがわかった。活動内容では、体の動かし方を取り入れていることが興味深かった。本校でのキャリア活動でもストレッチやマッサージなどを取り入れてみたいと思った。
- ・②難聴生徒が読唇できるとして、1年間授業していたが、実際には授業の内容がわかっていなかったことから、iPadでの文字翻訳を利用し、さらに手話での会話をするようになった事例より、生徒が困っていることや要望を教員に伝えられる信頼関係が重要であることがわかった。また、文字翻訳ソフトなどICT機器を活用していくことが有効だとわかった。
- ・③大学進学においても、支援の継続性が重要であることがわかった。これを実現するには、生徒自らが障害の状況を客観的に把握、分析し、説明できるようになることが重要だと思った。
- ・②同一敷地内に沖縄県立南風原高等学校と特別支援学校南風原高等支援学校が併置され、職員にも兼務発令があり、それぞれの専門性は維持したままで、円滑に交流が進むような仕掛けを作っていて興味深い。特定の敷地をゾーンに分ける発想は、徳島県立みなと高等学園でも見られた手法だと思いました。
- ・授業の聞き取りに困難さを覚える生徒のために、教員がピンマイクを付け、その音声を

iPhone を使って、文字化する手法を提供しているのは、具体的な対応方法の1つとしてとして興味深く感じました。

- ・田辺高校の通級は、ゼロからのスタートで、ここに至るまで、研究中心の先生はご苦労されたことと思う。全日制では1単位35時間という縛りが厳しいと感じた。課題については本校とほとんど同内容である。
- ・沖縄県の分教室は県下で3校、それぞれ特色ある全日（農業、商業、地域文化など）との組み合わせを上手に活用している。場所を貸す・借りるだけの関係ではなく、合同でできることを通して、高校生も特別支援の生徒もそれぞれが学びあっていると感じた。とくに南風原の場合は、インクルーシブ教育の一つの理想形だと思われた。神奈川県でも取り入れてほしい

## (2) 自主シンポジウム 11:30~13:00

### 「子どもの力を引き出す効果的な子育て —トリプルPによる親の変化—」

司会者 石橋 美穂 (NPO法人前向き子育てふくおか)  
話題提供者 大河内 美和 (トリプルPインターナショナル)  
話題提供者 梶原 由紀子 (福岡県立大学)  
指定討論者 江上 千代美 (福岡県立大学)

#### 【概要】

- ・オーストラリアで開始された保護者向けセミナーで、保護者が具体的に子どもへの接し方を身につけ、それにより子どもの発達を支援する試み。

#### 【感想】

- ・具体的な前向き子育ての研修は、私も受けてみたいと思う内容だった。日本にもいくつか支部があるようだが、今後注目を浴びていくシステムだと思われた。

## (3) 特別講演 13:30~15:20

### 「絵本と子どもの心の発達 — デジタル化社会に溺れないために —」

講師 柳田 邦男 (ノンフィクション作家・評論家)  
司会者 原田 浩司 (宇都宮大学)

#### 【概要】

- ・資料に沿った内容で話があった。

#### 【感想】

- ・LDや発達障害については専門家ではないとの断りを入れながらのお話だったが、現在も様々な研究会や勉強会を続けておられる講師の見識の深さが表れていました。
- ・一緒に時間を過ごす・音にする言葉のリズムを楽しむ等、絵本の読み聞かせの楽しさを久しぶりに思い出しました。英語の音読にも生かしたいと思いました。

## (4) 学会企画シンポジウム 11時10分~13時00分

### 「発達障害の人の社会参加—大人になって幸せになるために—」

司会者：梅永 雄二 (早稲田大学教育・総合科学学術院)  
話題提供者：山岡 修 (NPO法人全国LD親の会)

西村優紀美（富山大学保健管理センター）

井口 修一（東京障害者職業センター）

指定討論者：志賀 利一（国立のぞみの園）

Laura Klinger（University of North Carolina）

## 【概要】

発達障害の人の社会参加は容易ではない。大人になって生じる課題とその支援方策について、保護者、大学生活、就労支援の立場から話題提供があった。

### ①親の会より

- ・LDや発達障害の人は、特別支援学校ではなく通常の高校・大学を出ているが、就労・自立期において何らかの支援が必要となるケースが多い。
- ・発達障害のある人が就労に必要な基礎能力を身につける場が質・量ともに不足している。
- ・せっかく就職しても離職が多く、職場定着は難しい。障害をカミングアウトしないと配慮されない。定着支援制度も不足している。
- ・仕事上の困難もあるが、生活上の悩みも多い。
- ・一人一人特性が違うので合わせるのが困難である。成人しても親と同居が8割である。親亡き後も心配である。
- ・就労を支える相談機関や立ち寄れる場、居場所も必要だ。
- ・就労面や生活面の支援、相談支援体制の整備がこれからの大きな課題である。
- ・知的障害を伴わない発達障害者の場合、通常の学校を卒業するケースが多く、在学中に特性に合わせた職業訓練や職場実習等を経験することが難しい。
- ・卒業後に社会性について学べる場を作ることが望まれる。
- ・発達障害者の場合、一旦就職しても作業能力や人間関係等の問題から離転職を繰り返すケースも多い。
- ・本人の作業能力の向上に加え職場の上司や同僚の理解が進むと定着が図れるケースが多い。
- ・発達障害者の場合、職場等においてストレスを貯めている場合、職務能力面では大きな問題がない場合でも、食事、衣服、金銭管理、休日の過ごし方等日常生活面で問題を抱えていることが多い。
- ・親亡き後の生活や経済面の不安は大きく、地域において、長期的・継続的に相談・支援を受けられるような体制の確立が望まれる。

### ②大学から

- ・合理的配慮には本人が支援を要請することが大事だが、「こうしてほしい」と言えないことが多い。
- ・例として、忘れ物やうっかりミスで留年したASDとADHDを併せ持つ女子学生Aの場合、支援室で情報整理とスケジュール管理等行い、薬剤師に合格、病院の薬局で声かけ等の配慮を受けつつ働いている。
- ・話すことが苦手なBの場合、初め一般枠で就職活動をしたが、採用にいたらず、2年目に障害者枠に切り替え就労した。

### ③就労支援から

- ・ASDに特化したアセスメントを実施している。

- ・発達障害のある人の相談がこの10年で4倍になった。
- ・就労にあたっては8割が障害を開示している。
- ・大学出てからつまづく人が多い。
- ・必要な支援と合理的配慮があれば職場定着は可能と考えている。

#### ④指定討論

- ・障害者雇用は右肩上がりである。
- ・大人になってから発達障害の診断を受けるケースが増えている。
- ・現在の制度にフィットしない40代が増加。
- ・アメリカでも日本でも似たようなことを聞く。
- ・以前は知的障害を伴った自閉症の支援が主だったが、知的な遅れを伴わない人が多く診断をうけるようになってきた。
- ・自閉症の人が進学する例も多く、普通高校から大学まで行くがその後がうまく行かない。
- ・家族もフラストレーションを感じている。
- ・アメリカでも教科学習が主で、ソフトスキルを教える時間がない。人材も不足。
- ・知的を伴わない子が増えているアメリカでは就労前移行支援を重要視。
- ・重要な点は4つ。①自閉症や発達障害の学習スタイルの違いを具体的に理解すること②社会や職業への移行プログラムの必要性③不安や感情のコントロールが重要④セルフコントロール
- ・雇用主や従業員、大学教員がLDとは、自閉症とはどういうものか理解する必要がある。
- ・発達障害の人が感じる週20時間の仕事での負担は、通常の60時間に相当することもある。
- ・就労は必ずしも正規雇用だけが成功ではない。仕事以外の余暇の過ごし方、友人や地域とのつながり等も大事。

#### 【感想】

- ・厚労省の調査でもニートといわれる人の4人に1人に発達障害、またはその疑いがあるとの報告があり、このシンポジウムでも通常の教育を経て、自立や就労の場面になって困難に直面することがわかる。今回の大会テーマでもある「発達障害の人の社会参加-大人になって幸せになるために-」は、学校段階からの卒業後を視野に入れた教育支援の必要性をあらためて感じた。特に発達障害等困難を抱える生徒が多く在籍するといわれる通信制の本校において、個々の生徒の実態や意向に沿いつつ、現実社会にあった支援が重要であると思った。
- ・発達障害者の感覚過敏、自己評価と現実との乖離などの特質を踏まえた、就労支援のためのアセスメントの改良や対応方法の実際などを聞くことができました。また、大学における実践で興味を抱いたのは、該当大学生の在学中の様子や対応事例を就労先に伝えて、職場適応のためのフォローアップを行っていることなどです。卒業後のアフターケアの大切さについて再認識させられました。
- ・発達障害者の就職では進学時と同様、事業者との情報交換が必要であることがわかった。障害者手帳があっても不採用になるという現実から支援団体が間に入って、障害への理解を促す取組は重要であるが、そういった団体からの紹介がなくても、社会全体で様々な能力の向き不向きについて理解していくことが必要である。本校では、在学中にインターンシップを行ったり、キャリア活動ICで事業者とやり取りする機会があるのでこ

れを継続していくべきだと思う。また、人生において仕事の在り方については、考えさせられるものがあった。生活のための給料や達成感が必要だが、人生の満足感・幸福感を得るには、能力や体力に見合った仕事を見つけることが大切だと思う。

(5) 自主シンポジウム 10月9日(月) 9時30分~11時00分

「発達障害学生に対する安定的な就労を支える連携の在り方

—大学・就労支援事業所・企業との連携の場づくり—

企画者：西村優紀美(富山大学保健管理センター)

司会者：西村優紀美(富山大学保健管理センター)

話題提供者：西村優紀美(富山大学保健管理センター)

中山 肇(NPO 法人就労移行支援事業所 LIAISON)

牧田 広民(株式会社 LIXIL)

指定討論者：志賀 利一(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

【概要】

発達障害のある大学生の就職に関し、関係機関との連携による支援について、具体的事例をもとに、各機関の取組の紹介を中心としてシンポジウムが行われた。

国立大学に設置された障害学生支援室、就労系障害福祉サービスの就労移行支援事業所、就職先の住宅設備機器メーカーから報告があった。

①大学より

- ・障害学生支援の中核組織として教育学生支援機構学生支援センターにアクセシビリティ・コミュニケーション支援室を設置。障害のある学生の修学支援と就職支援を行う。
- ・発達障害の学生への支援全体を「社会参入支援」と定義。
- ・学生が困り感を支援者との対話の中で外在化し、客観的な視点から眺める。
- ・発達障害のある学生に対する就職活動支援の難しさ、①仕事や職種についての明確なイメージがなく、偏った関心による職業選択になりやすい、②面接では、最も苦手とするコミュニケーション能力を問われ、評価される、③企業が求める社会人像と自己像とのギャップに苦しむという点。
- ・富山大学では、就職活動支援に引き続き、卒業後は地域就労支援機関と連携しながら、卒後就職活動支援を行っている。
- ・就労を果たした卒業生に対して、本人が希望すれば、卒後フォローアップ支援を行っている。

②就労移行支援事業所より

- ・発達障害者を中心に就労支援を行っている。
- ・企業・地域社会や教育・福祉機関・行政・医療等と連携しながら支援活動。
- ・事例の学生は大学卒業後、事業所に通所しつつ企業への就労を目指した。
- ・特性に応じた就労先を選択するためハローワークとの連携の他、独自の職場開拓をしながら求職活動を支援。
- ・就労後も企業と関係性を保持し、双方の課題解決や調整を図るためのコーディネートも重要な支援と考えている。

③企業より

- ・会社概要について説明。
- ・発達障害者を雇用する上での企業としての工夫や課題、当事者に対する合理的配慮の在り方等職場の担当からも話題提供があった。
- ・業務が重なると、優先順位がつけられない。少しのミスで罪悪感をもつ。
- ・本人が混乱しないよう業務内容をメモし、安心できるよう座席など環境を整備している。
- ・本人の障害特性からくる弱みは消えることはない。治まってくるものであるととらえ、克服してから仕事するより、強みを発揮しつつ、本人が努力できる環境を作りたい。

#### ④指定討論

- ・発達障害をもつ大学生の就労までのプロセスとして、本人・周囲の気づき、診断、職業能力、手帳、オープンかクローズか…とあるが、今後はもっと早い段階から取り組む必要がある。
- ・それらは一つの機関ではなく、複数の専門機関の連携が必須である。
- ・発達障害の方は「初めてが苦手」であることが多いので、教育から就労などへのバトンタッチの際には「つなぎ役」の役割が大きい。
- ・知的障害の就労支援がモデルとなる。職場体験等経験しながら本人に適した働き方、生き方を探したい。

#### ⑤フロアからの質疑応答

(大学で支援をしている担当者より、企業への質問)

- Q. ASDなど大学から障害者枠で企業へ就労する者が増えている。障害者雇用における人事制度等について知りたい。
- A. 企業全体についてではなく、一つの営業所としての例だが、現在、障害者雇用の社員は定期的に更新する契約になっている。特に問題なければ更新することになる。正社員登用の制度もある。人事評価は他の社員も同じ、企業の目標にそって行動しているかである。

(放課後等デイサービス事業所職員より、大学への質問)

- Q. 大学生の支援をしていて、大学入学以前に身につけておくといよいスキルや高校段階で取り組むべきことを知りたい。
- A. 大学で支援を受けるには、配慮を要請する必要がある。自分の苦手なこと、配慮を要する部分を自ら語るができることが大事だ。経験不足の学生が多い。いろいろな体験をして「こうしたらうまくいった」という経験を積んでおくに役立つ。

#### 【感想】

- ・富山大学は発達障害のある学生支援に関し10年以上の実績があり、その先進的な取組は、これまでも学会や各種セミナー等で広く発信されてきた。個人的な印象としては、当初は履修や学修支援、学生生活といった学内での適応に関する実践が多かったが、次第に就職や大学院への進学等、次のステージへ向けた支援にも重きが置かれるようになってきたように思われる。
- ・特に就労については、就職活動から就労さらに職場定着と就労継続まで、個々の学生の特性とニーズに応じた支援が大切で、関係機関との連携が欠かせない。今回の事例は、大学卒業後、就労移行支援事業所の利用を経て、企業へ就職したケースであるが、大学が就職先の企業まで、就労移行支援事業所と共に出向いてアフターフォローしている点

や就職した卒業生が定期的に大学の支援室に来所し、就労先での苦労や生活面での相談にも対応している点など、大学側の息の長いきめ細かい連携が、本人の安定的な社会的自立の大きな支えになっていると感じた。

- ・さらにその支えがあることにより、卒業生も不安が解消し、徐々に自発的に職場で支援を求め、社内でも「ごく普通」になる。各機関の支援の度合いも役割分担も柔軟に変化していくことも大事であると思った。
- ・今大会の学会企画シンポジウム内でも指摘されたように、ようやく動き始めた高等学校における特別支援教育だが、高等学校においても卒業後の社会参加へ向けた支援は重要である。大学と高等学校、またそれぞれの学校ごとに置かれている状況、さらに学生・生徒個々の違いはあるものの、自立に向けた準備期間を提供することのできる最後の教育機関であるといわれる高等学校において、就労・進学やその後を見据えた指導や、地域の労働・福祉等の関係機関と連携し、在学時から卒業後までを想定した支援に努めることが大切だと感じた。

#### (6) 自主シンポジウム 11時30分～13時00分

##### 「発達障害のある人の職場定着を支えるストレスマネジメントー余暇活動の重要性と職場定着支援のあり方ー」

企画者：村山光子（学校法人明星学苑）

司会者：村山光子（学校法人明星学苑）

話題提供者：原田剛志（パークサイドこころの発達クリニック）

秋元孝城（明星大学発達支援研究センター）

指定討論者：小貫悟（明星大学）

#### 【概要】

平成28年4月より改正障害者雇用法が施行され、発達障害のある人の就労支援が拡充する一方で「職場定着」に関する課題が積み残しとなっている。就職後の職場定着支援について、特に「ストレスマネジメント」に焦点をあてて、医療・大学支援者・当事者より話題提供があった。

#### ① 医療より

- ・医療的観点からみた発達障害者のストレスマネジメントは「疲労のマネジメント」と「動機の再生産」である。「体調管理とやる気の維持」である。
- ・余暇にも功罪がある。
- ・発達障害は脳の構造であって、「治らない」
- ・「生きにくさ」が許容範囲にあるなら「不得意」「苦手」ですむ。周囲の介入を必要とするほどの不適応を「発達障害」と呼ぶ。

#### ② 大学より

- ・近年、大学において発達障害の学生個々に応じた支援ニーズが高まっている。
- ・STARTプログラムでは、発達障害のある（または可能性のある）学生を主な対象として、スキルトレーニングを実施している。
- ・プログラムの目的は、「大学適応」と「社会適応・移行」であり、トレーニングによるスキルの獲得の他に、インターンシップによるスキルの運用を行っている。

- ・自身のストレス状態に気づき、余暇活動や気分転換といった方法で対処することが大学生活や社会生活を送る上で必須と考えている。
- ・発達障害のある学生が抱えるストレスマネジメントの課題としては、「ストレス状態に気づけない」、「自分がどのような時にストレスを抱えるのかわからない」といった『気づき』に関するもの、「気分転換や余暇活用のレパートリーが少ない」、「自分に合ったストレスコーピングがわからない」といった『予防・対処』に関するものが挙げられる。
- ・ストレスコントロールは大学から就労への移行後に必要性を感じる。

### ③ 当事者より

- ・発達障害者は、定型発達者よりも常に高いレベルのストレス状態である。
- ・発達障害者が定型発達者を中心とした 職場・環境に置かれた場合、作業の遅さ、不注意、感覚の違いやその他発達障害者独特の挙動により周囲から異質視され、精神的に負担を感じる状況に置かれることが多い。
- ・さらに、抽象思考の困難さと原因を同じくする「主体性」の持ちづらさや、柔軟な思考・認知の欠如がもとで、常に他者基準の評価だけに自分をさらすことになる。
- ・社外の余暇活動を通して柔軟で適応的な認知を身につけることができた。

### 【感想】

- ・特別な支援を要する方の就労については、単に会社へ就職するだけでなく、就労後の職場定着支援が欠かせない。また、日々の安定した就労のためには職場や仕事面だけでなく、自分らしく働き続けられるためのストレスマネジメント、余暇活動のあり方も大事である。「自立と社会参加」においては単に就労することだけでなく、その人らしい生き方や生きがいにも目を向けたい。卒業後の進路・就労だけでなく、それを支える生活面や余暇や趣味、生涯学習等、一人一人の学校卒業後の豊かで充実した人生につながるような、高校段階での学びやさまざまな経験の場を提供したいと思った。

(7) 本校ポスター発表 10月8日(日) 15:40~17:00

「高等学校における通級による指導」制度化に向けた通信制高校での実践  
自立と社会参加を目指す学校設定科目「キャリア活動Ⅰ・Ⅱ」

### 【概要】

本校のキャリア活動Ⅰ・Ⅱ(K)の7年間の取組について発表した。本校の隣の国立特別支援教育総合研究所のポスター発表も高等学校における通級をテーマとしたもので、いずれも多くの人を迎えることができた。説明に対する質問も多く出て、予想を上回る関心の高さを感じた。主な質問は以下のとおり。

- ・対象の生徒はどうやって選ぶのか。
- ・いつ頃、受講生を決めるのか。
- ・受講に抵抗のある場合はどうするか。
- ・講座の回数、単位数など
- ・指導内容、教材、指導方法について。
- ・職員体制について
- ・受講した生徒のその後の進路や就労について

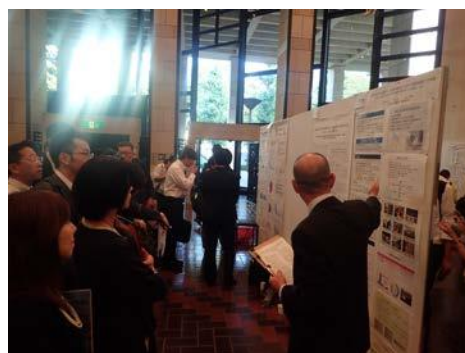
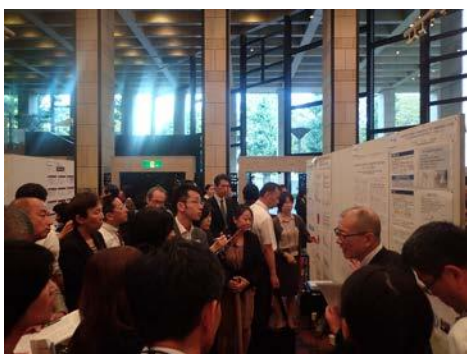


- ・中学校からの引継ぎはあるか。
- ・生徒の手帳取得について など

全体説明の後、他県の高校関係者、特別支援学校職員等学校関係の他、支援機関や研究機関等、多くの関係者から個別に質問を受けるとともに、先方の取組状況も聞くことができた。

### 【感想】

- ・本校の発表時間だけでなく、他の時間帯のポスター発表においても、今後のキャリア活動の講座や生徒支援に関するヒント、さらに校内体制作りや保護者支援、関係機関との連携に関する実践事例や工夫などから得るものも多く、有意義な情報交換ができた。
- ・立川先生を中心に、キャリア活動についてのポスター発表を行いました。他校などの発表より盛況でしたが、修悠館高校の腕章などを付けておけば、個別の質問にももっと対応可能だったと思います。かけ算や簡単な英語などについての教育方法の発表が、他校などでは盛んでしたが、本校でも学力形成のための指導として、トピック的に、例えばかけ算の苦手の生徒のための単発な講座などを設けて、かけ算カードゲームなどを交えながら教えてみるなどの機会が、前向きに検討されてもいいように思いました。
- ・学校設定科目であるキャリア活動でどのように単位を取得しているのかという質問が多数あった。やはり、普通科で通級指導を行うには様々な制約があるようだ。他校の発表では、視覚的な計算方法や音声と絵を使ったアルファベットの認識の仕方など、それぞれの能力に合わせて工夫された指導を知ることができた。一斉スクリーニングを受けていても、計算や読みに困難を感じている生徒がいることを踏まえると、本校でも生徒と教員で互いに情報を共有して、このような指導を活用していけたらよいと思う。



【本校発表内容】

(1) 「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

～外部機関とのネットワークづくりや重層的支援の充実を通して～

文部科学省  
「多様な学習を支援する  
高等学校の推進事業」



外部機関との  
ネットワークづくりや  
重層的支援の充実を通して

神奈川県立横浜修悠館高等学校

本日の流れ

- ◆本校の特徴
- ◆本校の重層的支援
- ◆文部科学省事業



本校の特徴



◆横浜修悠館高校の概要

- 単位制による通信制の課程・普通科：  
湘南、横浜平沼両校通信制を集約、  
平成20年度開校
- 平日講座と日曜・IT講座を科目ごとに履修：  
「通学型通信制」の機能を持つ。

中学校や全日制高校、定時制高校、  
従来の通信制高校とも異なるシステム

◆横浜修悠館高校の生徒

- ・何らかの理由で、全日制高校への進学を選ばなかった、  
選べなかった生徒たち
- ・一度は全日制高校や定時制高校に進学したものの、  
何らかの理由で退学した、退学せざるを得なかった生徒たち

横浜修悠館高校は、  
さまざまな課題を抱える、さまざまな生徒たちの  
セーフティーネット

発達障害を抱えるなど、  
支援を必要とする生徒も多い

全体を支援する発想 = 修悠館スタンダード



本校の重層的支援

～ 開校以来の積み重ね  
個別の生徒に向けた支援から  
全体の生徒に向けた支援へ ～



## これまでの取組

- ◆ 平成21年度、22年度  
文部科学省「特別支援教育総合推進事業」
  - ・生徒の実態把握のための入学時アンケート
  - ・個別対応スクーリング
  - ・「自立活動」的 school 設定科目⇒「キャリア活動」
  - ・スクーリング・レポートのUD化  
⇒「修悠館スタンダード」
  - ・特別支援学校等との連携

## これまでの取組

- ◆ 平成24年度、25年度、26年度  
文部科学省指定研究開発学校
  - ・将来の自立と社会に必要な力をつける  
必履修科目「国語」「数学」「英語」  
個別対応スクーリングの発展  
通級的指導
  - ・「自立活動」的科目「キャリア実習」
  - ・「キャリア活動」の進化・多様化  
⇒K・J・C
  - ・「修悠館スタンダード」の改善

## ■ 本校の重層的支援

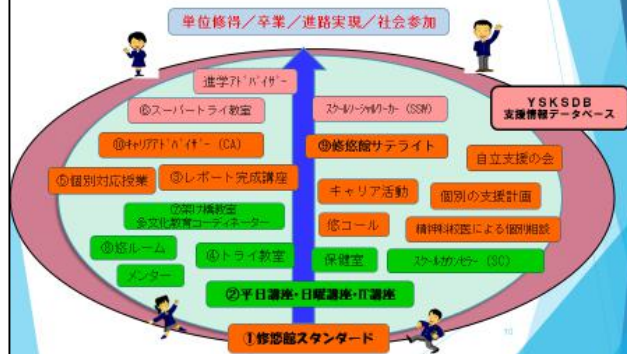
新入生、転・編入生全員にアンケートを実施

- ①「きめ細かな学習支援を行うためのアンケートのお願い」  
(今までの学校生活で苦手だったことや、受けてきた支援について)
- ②「外国につながる生徒のみなさんへのきめこまかな学習支援を行うためのお願い」  
(国籍、生徒・保護者の日本語の力について)

生徒の課題を集約する

## ■ 本校の重層的支援「自立と社会参加」

(平成29年10月時点イメージ)



## ① 修悠館スタンダード

### 学校生活のUD化

「生徒にも教員にも分かりやすい学校を」

(発達障害等の生徒への) 無いと困る支援が、  
(すべての生徒への) あると便利な支援になる

- ・ **全ての生徒**の困難さを取り除く試み。
- ・ 生徒を困らせない取り組み。
- ・ **全体**で共有。

平成22年度スタート。その後改訂を重ね、現在はver. 8  
スクーリングでの説明や板書のしかた、レポートの作成、  
校内の掲示物などあらゆる場面で生かされている。

## ① 修悠館スタンダード

◇ 「修悠館スタンダード」は、通信制高校の  
ユニバーサル・デザインを基にした学習支援の  
方法を教職員全体に呼びかけるもの

◇ 単位修得率向上を目指してスタートした  
ユニバーサル・デザイン化が  
様々な面での変化をもたらした

開校当初の混乱が収束

➡ 落ち着いた学習環境の確保へ

### ①修悠館スタンダード コンセプト

- ◆ 「（発達障がいのある生徒に対する）無いと困る支援」が、「（全ての生徒に対する）あると便利な支援」になる。
- ◆ スクーリングについて来られない生徒に目を向け、メンタル面までフォローする。
- ◆ わかる楽しさ、できた喜びと達成感！〈ネタ〉
  - ・活動の楽しさ
  - 〈ネタ〉とは、ことば・話題・しぐさや話し方・教材・教具・実験・流れ・・・・
- ◆ 「支援教育」と「学力向上」の2つを同時に実現しようというチャレンジ！  
「誰もがわかる授業」に向けて。
- ◆ まずは、「簡単にできそうなことから」

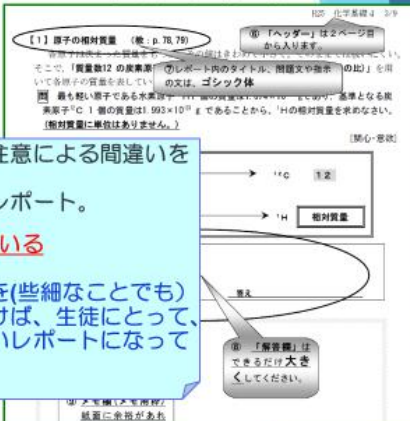
### ■ ①修悠館スタンダード（環境調整）



校舎、教室掲示の示し方

突き当たり、歩いた先に示しておく

### ■ ①修悠館スタンダード レポートのユニバーサルデザイン化



- 生徒のミスや不注意による間違いを回避。
- 取り組みやすいレポート。

毎年、改善している

新たに気付いた点を(些細なことでも)続けて改善していけば、生徒にとって、より取り組みやすいレポートになっていく。

### ■ ①修悠館スタンダード（スクーリング）

○全教室に、スクーリングの注意事項を掲示



### ■ ①修悠館スタンダード（スクーリング）

○生徒の特徴をふまえる

- ・学習の積み重ね
- ・視覚優位、聴覚優位、緘黙
- ・書字

説明：はっきり・ゆっくり・短文・やさしい言葉・励ます  
板書：必要な内容のみ・消す前に確認・ICT利用

○机間支援とチェック

- ・スクーリングでの、個別の声かけ、励まし  
→ 生徒は次の設問に自信を持って取り組める。
- ・生徒がどのようなことで困っているのかを、生徒の表情や行動から察知する

### ■ 修悠館スタンダードの改善：スクーリング見学週間

保健体育科	<ul style="list-style-type: none"> <li>○次回のスクーリングの予定(日程○レポートの回数○活動場所○種目等)をはっきり伝えている(板書)。</li> <li>○昨年同様、前期、後期の最初にスクーリングでオリエンテーションを行い、実技への参加に対する不安を軽減した。</li> <li>○出席者数も増加している一方で、コミュニケーションがとりづらい特性の生徒が増加している。出席の誘い方として、コンテンツを6回○視聴代替2回(逆パターンもあり)そしてオリエンテーション(スクーリング参加)2回という選択肢の提示を積極的に行っている。</li> </ul>
芸術科	<ul style="list-style-type: none"> <li>○見本作品を掲示して、視覚的に訴え、</li> <li>○今回の内容を最初しっかりと提示し</li> </ul>
英語科	<ul style="list-style-type: none"> <li>○課題やキーセンテンスを前もって板書</li> <li>○板書はなるべく消さないほうが良い。</li> <li>○音読など生徒が授業に参加する形を取り入れるようにする。</li> <li>○時間配分を考え、簡明な説明とともに個別指導のための時間を十分にとっている。</li> </ul>
家庭科	<ul style="list-style-type: none"> <li>○板書の字を大きく書き、ゆっくり話すことをこれからも行う。</li> <li>○視覚に訴える教具の活用により、生徒の理解を深める助けとなるので、今後も取り組む。</li> <li>○レポートの内容をさらに取り組みやすいものへと工夫する。</li> </ul>

互いにスクーリングを見学し、改善につなげる

## ②スクーリング（平日・日曜・IT）

### ○平日講座

- ・レポート通数の3倍の回数のスクーリングを実施。

(例) C英語基礎（2単位）

レポート 6通

スクーリング 18回（必要最低数 8回）

スクーリング出席者全員の  
レポートの完成をめざす

## IT

- 講座登録生徒（活動生）に個人IDとパスワードを配付  
・インターネットで、ITコンテンツ（補完教材）を活用  
・個人の学習状況（レポートの合格状況など）を確認可能

- システムを活用し、インターネット利用の

**IT講座（eラーニング）**で学習を進めることも可能

「引きこもり」、「入院生徒」等の  
登校が困難な生徒、  
「書字困難(障がい)生徒」にも  
学習環境を提供

## ③レポート完成講座

レポートの完成を目指す個別指導補習教室

月・水・木に実施、時間割に位置付けている。

- ・スクーリングに参加できなかったところや、スクーリングでよくわからなかったところを個別に指導。各教科の教員が個別に指導。

## ④トライ教室

「レポート完成講座」に参加する（教室に入る）こと自体がハードルとして高い生徒に対する個別指導補習教室  
レポート完成講座と同じ時間帯に実施。

- ・レポートの内容だけでなく、レポートの取り組み方や、中学までの学習の復習なども個別に指導。

学習支援ボランティア（YSKサポーター）や教員が担当。

平日スクーリングで、遅れてしまった生徒の  
レポートの完成を、個別にサポートする

## レポート完成講座&トライ

年間を通じてスケジュールされた補習。  
職員室前に、印刷して置いてあり、いつでも確認できる

### 前期 レポート完成講座&トライ教室 早見表

## ⑤個別対応スクーリング（取出し）

- ・本人・保護者・関連機関との連携をとりながら、個別の面接指導を実施。
- ・個別の指導計画を立て、生徒の学習到達目標にあわせて、面接指導の方法や報告課題の内容を柔軟に対応。

## ⑥高学力の生徒に対する支援（スーパーライ）

- ・予備校使用教材での予備校講師による受験対策授業(英語・国語)
- ・生徒のモチベーションの向上
- ・四年制大学への進学希望者に対して、ゼミ形式演習型指導

## ⑦架け橋教室・多文化教育コーディネーター

外国につながるのある生徒の  
支援と総合相談の場

## ⑧悠（YOU）ルーム

心安らぐ場所。教員が交代で常駐。  
集団が苦手な生徒の、空き時間の居場所

悠（YOU）ルーム



### ⑨ 修悠館サテライト

湘南・横浜若者サポートステーションとの連携

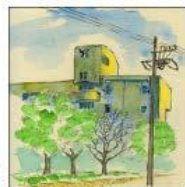


### ⑩ サポートティーチャー（キャリアアドバイザー）



## 平成27年度、28年度、29年度 文部科学省事業

個別のセクションによる支援から  
全体で連携した支援へ



### 文部科学省

多様な学習を支援する高等学校の推進事業

#### ◆ 研究開発課題 ◆

定時制・通信制における支援相談体制の構築

～外部機関とのネットワークづくりや  
重層的支援の充実を通して～

### ■ 支援情報データベース（YSKSDB）

- ・さまざまな立場の人が  
さまざまな角度からアプローチ
- ・複数の支援を活用する生徒の存在



支援情報を一元化・共有化すれば、  
より効果的な支援が見込まれる



支援情報データベース構築の試み

### ■ YSKSDB

#### ○ 支援情報データベース化の意義

個々の生徒に対する、複数の支援に関する情報を  
簡単に確認でき、互いの支援に活用できる。



個別のセクションによる支援から  
全体で連携した支援へ

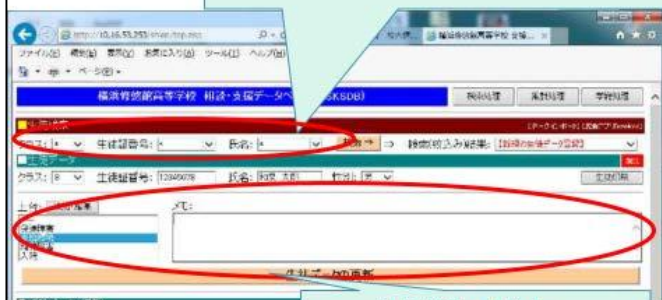
検索機能をつけることで、「支援事例集」  
「支援マニュアル」としての活用が期待できる。



個別の生徒に向けた支援から  
全体の生徒に向けた支援へ

### ■ YSKSDB（イメージ）

クラス、生徒証番号、氏名を  
プルダウンで選択すると・・・



支援情報の入力と、  
入力したものの閲覧ができる。

■ YSKSDB

○今年度運用開始 ⇒ 課題等への対応を図る

- ・複数の支援を受ける生徒について、情報の共有が出来る
- ・情報を一元化することで、支援事例を検索しやすくなり、「相談支援マニュアル」として活用できる



それぞれの立場での個別の支援を  
全体の支援へつなげる試み

課題

- ・「簡単に見られること」と「情報セキュリティ」のバランス
- ・情報入力にかかる教職員等の負担
- ・外部機関との情報提供に関わる諸問題

■ 外部機関との連携

「修悠館サテライト」



「湘南・横浜若者サポートステーション」出張相談  
平成25年度開始  
平日3日 開室  
在校生（非活動生徒含む）、保護者  
卒業生、近隣中学生

高校での支援

- 課程の強みを生かす工夫
- 適格者主義を越える
- 将来の社会を支えるために

- 自立と社会参加を目指して  
～ 高校の役割は「社会への入り口」指導 ～

就職・就労・・・

キャリア室  
(キャリアアドバイザー)

サテライト  
(相談員・サポートステーション等)

将来

個別の支援計画

(就業体験・障害手帳)

教育・労働・福祉 の一体化

◆ 本事業の目的

様々な困難・課題を抱える本校生徒

重層的支援のどれかにつながる

支援情報を支援者が共有

生徒に更に適した支援

高校卒業後の社会的自立

ありがとうございました。

神奈川県立横浜修悠館高等学校

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」調査研究校による研究発表協議会

## 横浜修悠館の 外国につながるのある生徒に かかわる取組

井上恭宏  
平成29年11月15日

1

## 横浜修悠館と神奈川の状況

■神奈川県立高校で在籍が多い学校

- ・通信制
- ・定時制
- ・多部制昼間定時制2校
- ・「在県枠」のある学校

2

## 横浜修悠館の生徒の傾向

■2017の在籍は157人、活動生は104人、つながりのある国は25。  
■2008～2017の入学は449人  
卒業は64人で18.8%(8組は21人)。2016年度の卒業は17人。  
■入学する生徒の傾向は…

- ①いじめなど、さまざまな理由での不登校経験がある。
- ②高校進学について考えていなかった。
- ③全日制や昼間定時制を受検して不合格だった。
- ④定時制との比較のなかで、夜間を避けて。
- ⑤発達の面、心身の面での支援が必要で。
- ⑥日本生まれの外国につながるのある生徒が多い。

3

## つながりのある国内訳 (2016年度 在籍161)

2016横浜修悠館	県下全体の推計2015
1. フィリピン…49	1. フィリピン…423
2. ブラジル…21	2. 中国…372
3. 中国…13	3. ベル…107
4. アメリカ…11	4. ベトナム…104
5. ベル…11	5. ブラジル…94
6. タイ…9	6. アメリカ…93
7. 韓国朝鮮…7	7. 韓国朝鮮…87
8. ボリビア…4	8. タイ…53
8. ベトナム…2	

横浜修悠館は、  
①フィリピンの生徒が多い。  
②中国の生徒が少ない。  
③ベトナムの生徒が少ない。

4

## 横浜修悠館の「支援するためのツール」

- ①グループへの位置づけ
- ②在籍把握(悉皆調査)
- ③通訳派遣事業の活用
- ④架け橋教室(生徒を支援する動きの総体)
- ⑤多文化教育コーディネーター・サポーター制度
- ⑥外国につながるのある生徒の教員への周知
- ⑦修悠館スタンダード
- ⑧8組(課題が大きいと見られる生徒を8組に集中)
- ⑨「キャリア活動J」(2012年度から実施)
- ⑩学校設定科目「日本語」(2017年度から実施)
- ⑪関連機関(児相、生活支援課、NPOなど)との連携

5

## 8組

■相談支援Gの「つながりのある生徒」担当教員が担任。  
■入学時に、課題のより重いとみられる生徒から8組に集中して配属し、課題の拡散、後追いの対応を防ぐ。2010年6月の事件を受けて、2011年度から実施。  
■8組担任は、  
GL/多文化C・S/C活動J担当者/日本語担当者との間の連絡役でもある。  
■「8組への集中」によって、何が変わったか…。

6

## 8組 ■「8組への集中」によって、何が変わったか…。

集中前：  
中学でいじめられてきた「つながりのある生徒たち」が、クラスを超えてラウンジにたまり、生徒指導案件を起こす。

「8組への集中」によって…

- 後追いの対応を防げる。
- 生徒の良い動きを広げることができる。

7

## 多文化教育コーディネーター・サポーター

■多文化教育コーディネーター派遣事業は、  
ME-netと教育委員会の共同事業(年間50回の派遣)  
■8組担任との連携  
■8組の生徒を中心とする密着型サポート  
■校内巡回型の支援「移動架け橋教室」  
■教職員との連携  
■中学校、地域の支援者、支援グループとの連携  
■通訳の手配  
■キャリア活動J担当者との連携

8



## 学校設定科目「キャリア活動J」

- 2012年度から月・木の11:00～14:00に社会学習室で日本語教師資格を持つ非常勤講師により実施
- つながりのある生徒の支援をキャリア教育として位置づけ、多様なとりくみを展開
- 毎年度合計10名程度の生徒が登録
- 日本語学習や進路実現に向けた活動を支援
- 多文化コーディネーター・サポーターも側面から支援

9

## 「キャリア活動J」の指導内容など

- 指導内容… I J、II Jとも①②③④にとりくむ。
  - ①日本語指導 ②レポート学習支援 ③進路実現のための支援
  - ④各種検定対策…特に、「N1・N2合格」を目指す。
- 講座の設定
  - ①今年度は月曜日11:00～14:00が基軸時間帯  
…同時間帯の展開だが、I JとII Jとに講座を分けている。
  - ②プログラムによって、他の曜日・時間帯を活用する。
  - ③上限30単位の外付け。登録は平日を使う。
- 受講者:  
平日登校講座受講者を中心に、課題を抱えつつも一定の活動実績があり、修得に向けて努力ができる者で、申請・許可がなされた者。

10

## 国際科の学校設定科目「日本語」④単位について

- 対象生徒:  
新入生を中心に希望する生徒ではなく、学校サイドから指名する。
- 講座の設定:
  - ①今年度は月曜日の3・4限
  - ②プログラムによって、他の曜日・時間帯を活用する。
  - ③上限30単位に含まれる。
- 指導内容など:  
新入時に時間をかけて力をつけることを目標とする。1日2h/週。国語総合のレポートにとりくめるところまでの力を身につけさせたい。プレースメントテストと教育的アセスメントで教材を選定。

11

## 生徒M (2012ドミニカ共和国) の場合

- 来日5年。5号様式受検で入学。
- 1年次、年度当初の手続きミスで、日曜のみの登録となった。孤立しがちな環境の中、サポーターの支援を受け入れ、定着。
- 2年次、平日登校講座、キャリア活動Jに登録。スピーチ大会、生活体験発表で活躍。アルバイトも開始。
- 3年次、進路決定に向けて、専門学校数校を見学。経済的な面、実力の面など、さまざまな課題に直面。2014年度に3年度間で卒業。専門学校に進学。

12



2013年7月「第8回にほんごで話そう! 日本語スピーチ大会」で、大和市国際化協会理事長賞(最優秀賞)を受賞。左手に持っているのは、手作りの地図パネル。

## 8組/多文化CS/C活動J…の三極構造 全校の外国につながる生徒たち



## 外国につながる生徒と社会学習室

- 昼食: みんなで昼食を食べる(「昼食を食べる取組」が残った)。
- 交流相談の取組に学ぶ:  
外国につながるのいない生徒の入室を拒まない。
- 母港と外洋:  
社会学習室は、拠点(母港、塹壕?)となった。  
外洋を航海し、困ったら/リズムのなかで、母港へともどる。

13

ご清聴ありがとうございました。

(3) 『高等学校における通級による指導』制度化に向けた通信制高校での実践  
 ～自立と社会参加を目指す学校設定科目「キャリア活動Ⅰ・Ⅱ」～

「高等学校における通級による指導」  
 制度化に向けた通信制高校での実践

～自立と社会参加を目指す学校設定科目「キャリア活動Ⅰ・Ⅱ」～

I. 課題と目的

- 昨年、高等学校における「通級による指導」の平成30年度からの導入が示された。
- 発達障害等困難のある生徒の在籍率（通信制＞全日制）
- いわゆる「登校型」の学習形態を持つ公立通信制高校での実践を報告するとともに、「自立に向けた準備期間を提供することのできる最後の教育機関」における「通級による指導」の在り方を検討したい。

高等学校における「通級による指導」  
 ～平成21年高等学校ワーキング・グループ報告～

- 「将来の制度化を視野に入れ、…種々の実践を進める必要」
- 「自立にも資する教科・科目を開設し、これを**選択科目**として位置付け、**通級指導教室のような形態**で実施することも考えられる。」

神奈川県立横浜修悠館高等学校

- ・平成20年度開校
- ・在籍生徒数 2205名（H29. 9月現在）
- ・「登校型通信制」の機能を持つ通信制独立校
- ・単位制 全36クラス（学年はない）
- ・生徒のもつ課題やニーズは様々



II. 方法

学校設定科目「キャリア活動Ⅰ・Ⅱ」

- 将来の社会的・職業的自立が目標
- 安心できる環境、居場所（通常の学級とは別の学習室）
- 小集団でのチーム・ティーチング（必要に応じ個別指導）
- 実際の「活動」と具体的な「体験」を重視
- 生活リズム（Ⅰ：月曜1時間目、Ⅱ：火曜1時間目）

週1時間  
 教室での講座



年6～7回  
 校内・外での体験

《学習内容》

- 「いろいろな仕事」「働く」「社会人としての基礎力」「コミュニケーション」「自己理解」等をテーマ
- 生徒の実態や状況により内容や方法など柔軟に対応

受講までの流れ

- ・教員間で「気になる」生徒
  - ・関係機関（医療・福祉・教育）に関わる生徒
  - ・発達障害等の診断、手帳（療育・精神・身体）をもつ生徒
  - ・「きめ細かな支援のために」アンケート（入学時）
  - ・「自立支援の会」（保護者の会）の生徒
  - ・個別の支援計画を作成した生徒
  - ・受講を希望する生徒
- など

本人・保護者へ説明会（必要に応じ個別面談）

意向確認（「受講願い」提出）

受講生徒決定

週1回講座

- 毎回、各自の身近な出来事等を発表する機会を設けた。
- 学習内容は特別支援学校の進路学習や自立活動、就労支援機関のプログラム等を参考にした。
- 発言を引き出し、人の意見を聞き、考える場面を設けた。

年間6～7回  
 体験活動

- 企業、福祉施設、特別支援学校等と連携した。
- 活動の前後にSSTを含む事前・事後学習を行った。

	校内で	事務室の協力 夏季に作業実習	事務作業、農作業、環境整備 自主製品作り など
校外へ 地域の 資源	特別支援学校	作業室使用 学校行事参加	洗濯班、調理班で作業実習 ボランティア体験 など
	福祉施設	特養ホーム 福祉事業所 等	見学・仕事体験 作業体験 など
	企業	会社、特例子会社 工場、店舗 等	職場見学、職業インタビュー 職業体験 など
	その他	ハローワークで就活講座、市立図書館で仕事体験 消費生活センター、防災センターで生活・安全学習 など	



### Ⅲ.結果

#### 《受講生徒・担当教員》

##### ○生徒について

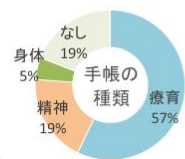
- ・ 7年間で計44名が受講し、42名が単位修得した。
- ・ I 修得の8割以上の生徒がII受講を希望した。
- ・ 7：3で男子が多く、17～18歳が多かった。
- ・ 42名中34名が障害者手帳所持（受講後取得を含む）。
- ・ 発達障害の診断がある生徒は約半数である。
- ・ 卒業32名、退学2名（理由：就職、福祉施設入所）

##### ○担当教員について

- ・ 7年間で10名が通常の各教科指導に加え担当した。
- ・ 10名中3名が特別支援学校での勤務経験者である。

#### 7年間の受講生徒

年度別生徒(教員)数	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
キャリア活動Ⅰ	11 (3)	4 (2)	6 (2)		4 (2)	4 (2)	6 (2)
キャリア活動Ⅱ		7 (2)	4 (2)	6 (2)	4 (2)	4 (2)	3 (3)



#### 《見えてきたこと》

##### ○一人ひとりの生徒に明らかな変化。

（自信、自己理解、自己肯定感、意欲、仲間意識など）

##### ○通常の学習活動（スクーリング出席、レポート作成等）への意欲と生活リズム。

##### ○進路・就労に対する生徒の主体的、前向きな姿勢。

##### ○安心できる環境と仲間の中で学ぶ効果。

##### ○本物を見ること、体験活動の意義。

##### ○「できる」「役割を果たす」経験の大切さ。

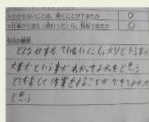
##### ○教員側の気づき（生徒理解、特別支援教育の視点、キャリア教育の重要性など）。

##### ○関係機関との連携や地域資源の有用性。

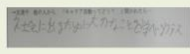
##### ○通信制のメリット（時間的ゆとり、柔軟なシステム）と難しさ（生徒の把握、ニーズの多様性...）。

#### 生徒の感想より（ほぼ原文）

- ・ キャリア活動の授業は遅刻しないで出席できた。
- ・ 毎回やっているプリントで働くことや、あいさつ、仕事について大切なことを沢山学んで身につけた。
- ・ 普段、見れない場所を見学できた。
- ・ クラス全員仲よく学べる。
- ・ スーパーマーケットやハンバーガーショップで接客について学べたことが印象に残っている。
- ・ キャリア活動をやる前より始めてからの方がアルバイトや働く事について自信がいった。



など



### Ⅳ.考察

##### ○本校において「心理的な抵抗感」は受講生徒に関しては少なく、「通級」的環境で学ぶ効果は非常に高かった。

##### ○本校の特徴（県下全域の生徒、登校型の通信制、単位制高校）から、「自校通級」と「他校通級」の両方の特徴が見られた。

##### ○高等学校においては地域や学校ごとの実態、課程や学科の特色により状況は様々であり、生徒の抱える困難も様々である。高等学校における「通級による指導」の必要性和効果は高いが、その制度が一人ひとりの生徒にとって意義あるものになるよう、引き続き検討していくことが大事であると考えている。

##### ○通信制高校である本校だから可能なこと、困難なことがあった。他校や中学校等の実践から学び、関係機関との情報交換により、検討・工夫を重ねていきたい。

### 「キャリア活動」履修後の進路・就労支援

- ・ 企業・事業所等でインターンシップ実施。
- ・ 関係機関との連携による進路・就労支援。

#### 卒業生(32名)の進路先

就労(障害者雇用)	8(5)名
就労移行支援	6名
就労継続支援	7名
作業所	2名
職業訓練施設	5名
その他 (アルバイト、進学準備、未定)	4名



大学の学生食堂で



スーパーマーケットで

### 高等学校における通級指導について大切なこと

#### 1 通級指導に対する正しい理解と啓発

#### 2 全職員で生徒を支援するという姿勢

- ①通級指導担当者だけに任せない。
- ②個別の指導計画の作成など、全職員で情報提供・情報共有に努める。
- ③特別支援教育は特別支援学校のみで行うものではないという認識を職員全員が持つ。

入学してきた生徒一人ひとりの能力を伸ばすのは、すべての学校に与えられた使命である！

### 【質疑応答(本校分)】

- Q. 来年度より本校は通級指導が導入される。学年制普通科への通級指導の導入に不安を感じる。単位制であれば通常の授業にいなくても周りに不審がる生徒もいないが、学年制であると周りが不審がる可能性もある。取り出しされている本人も抵抗があるのではないか。また、生徒の突発的な行動による生徒指導上の困難はないのか。(保土ヶ谷高校副校長 高橋 伸一)
- A. 横浜修悠館の通級的指導と今後導入する通級は根本的に異なるので気を付けてほしい。取り組み方については導入校でしっかりと規則を作ってそれに則ってほしい。(高校教育課指導主事)
- A. 今のところキャリア活動の中で問題行動が起こったことはない。授業中に走ってどっかに行ってしまった生徒がいたが、落ち着いたら戻ってくる子であり、特性を理解していたので問題にならなかった。(本校)
- Q. データベース化する上で、外部機関との情報提供に関わる諸問題とありますが、具体的にどんなものがあるのか。(県立高校副校長)
- A. 主に個人情報に関わることである。外部機関への情報共有の線引きやルール作りを検討中である。(本校)
- Q. 様々な支援体制があるなかで生徒にどの支援を選択させるのか、ガイダンスするのが難しいのではないか。(私立高校副校長)
- A. 修悠館は教員が生徒の手をひっぱってそれぞれの支援につなげている。また、支援はそれぞれの学校の持つ強み(横浜修悠館高校では通信制)を理解したうえで、必要に応じて支援を変化させてきている。そのため、厚木清南高校の外部視察の際に厚木清南高校ならどうするという視点はとても良いと思う。(本校)

## Ⅷ 調査研究事業終了にあたり

- 平成 20 年度開校以来、目前の多種多様な生徒の課題に対し、待ったなしの必要に迫られ様々な支援策をとってきた本校にとって、3 事業目となる文部科学省調査研究事業が最終年度を迎えることとなった。開校当初と比較すると在籍生徒数は約半数となり、生徒像は大きく変化した。校内で群れ集まり、落ち着きのない様子の生徒が激減し、本校入学までの不登校や引きこもり経験、発達上の課題、学習経験や習慣の不足、コミュニケーション能力の不足、緘黙等が大勢を占める。生徒一人ひとりを取り巻く環境や抱える問題の非社会的な傾向が鮮明となった。高等学校だけでは状況の改善は望めないため、関係機関や、外部資源との連携が不可欠となり、校内の相談支援情報をまとめると同時に適切な外部資源へとつなぐという今回の調査研究事業の試みは有益であった。
- 平成 28 年 4 月 1 日「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が施行され、教育現場での「合理的配慮」が求められた。また、「I はじめに」にあるように神奈川県では平成 29 年度に知的障害のある生徒が高校教育を受けるインクルーシブ教育実践校が指定され、平成 30 年度には高等学校での通級による指導が開始するが、入試で選抜され、ある程度学力などが均質化された生徒層で構成される多くの高等学校にとって、上記の取組みや本校のこれまでの取組みが、自分たちとは違う特別な学校のこととして他人事のような無関心に包まれる恐れもある。
- 内閣府の調査によると平成 27 年度の 15～39 歳の引きこもり人数は 54.1 万人。前回調査より 15 万人ほど減少しているが、これは対象者の年齢が上がったためとも考えられ、30 年度には 40～59 歳を対象にした初の実態調査を行うとしている。また、文部科学省の調査では平成 28 年度小中学校の不登校生徒はおよそ、13.5 万人に上り、中学生は 1,000 人当たり 30.1 人で小中ともに前年度を上回っている。不登校の要因の大きなものは「不安」「無気力」である。その背景にある子どもの貧困率は、平成 29 年 6 月の厚生労働省発表では 13.9%。17 歳以下の子ども 7 人に 1 人の割合となっている。
- 少子超高齢化の進む日本の中で、生産年齢の数十万もの人々が引きこもりで苦しんでいる。この数は今後増加する可能性もあり、多くの生徒にとり社会に出る直前の教育機関、「最後の砦」としての高校の果たす役割は非常に大きい。昨年度本校で実施した講演会で、放送大学副学長の宮本みち子先生は、これからの高校教員にはソーシャルワークの視点が必須であると述べられた。分かる授業を通しての学力向上、適切な生徒指導を通しての信頼関係づくり、進学

や就職の出口指導、等の従来の指導を大きく超える必要がある。生徒が高校卒業後に、辛い時には適切な人や機関に相談しながら乗り越えて働き続け、これからの社会を支える人材として、自己を肯定しながら人生を送ることができるように、高校在学中から、必要に応じて地域社会や専門スキルのある関係機関、外部資源と協力して支援の道筋をつけていくことが、これからの高校には求められる。また、そのような高校が社会や行政などの評価を得られるようになることが望ましい。

- 本校は平成 29 年度で開校 10 周年を迎えた。異動により教員が入れ替わる中でも本校支援システムは改善され充実してきた。今後も大きく後退することが無いよう、円滑な引継ぎと話し合い、意思疎通が必要である。
- この調査研究事業報告が同様の課題を抱えて頑張っておられる先生方にとって何らかの参考になり、それと同時に、ご意見やご批判をいただければ幸いである。

平成 30 年 3 月

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」校内委員会



文部科学省 「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

神奈川県立横浜修悠館高等学校 平成 29 年度

【推進事業検討会議委員】

氏 名	所 属 ・ 職 名
前嶋 深雪	相模女子大学、星槎大学、星槎大学大学院 講師
安形 和倫	横浜市こども青少年局青少年部青少年育成課・担当係長
岩本 真実	湘南・横浜若者サポートステーション・総括コーディネーター
稲葉 雅彦	横浜市立中和田中学校・校長
野崎 典子	横浜修悠館高等学校保護者コミュニティ・代表委員
福田 裕志	神奈川県立総合教育センター教育相談部教育相談課・課長
岡野 親	神奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課・課長
坂野 敦子	神奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課・指導主事
橋本 雅史	神奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課・指導主事

【校内委員】

校長	原口 瑞
副校長	久祢田 啓嗣
教頭	木村 幸蔵
総括教諭 1 班リーダー	小嶋 毅
総括教諭 3 班リーダー	滝瀬 和俊
総括教諭 2 班リーダー	大谷 英弘
教諭 研究主任	小俣 弘子
教諭 1 班	島田 聖子
教諭 1 班	山田 佳典
教諭 1 班	水口 菜生子
教諭 1 班	高橋 千鶴子
教諭 1 班	大西 優
養護教諭 1 班	曾根 浩実
教諭 2 班	立川 直之
教諭 3 班	小出 実
教諭 3 班	桑島 隼
教諭 2 班	佐藤 勇介

文部科学省「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

定時制・通信制課程における支援相談体制の構築  
-外部機関とのネットワークづくりや重層的支援の充実を通して-

平成 29 年度 最終年次報告書

平成 30 年 3 月発行

発行者 神奈川県立横浜修悠館高等学校

編集者 文部科学省多様な学習を支援する高等学校の推進事業  
調査研究校内委員会



文部科学省

「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」

最終年次報告書

神奈川県立横浜修悠館高等学校